

SPARC M10 システム

プロダクトノート XCP 2080 版

FUJITSU

ORACLE

マニュアル番号 : C120-E708-02
2014 年 4 月

Copyright © 2007, 2014, 富士通株式会社 All rights reserved.

本書には、オラクル社および/またはその関連会社により提供および修正された技術情報が含まれています。

オラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社は、それぞれ本書に記述されている製品および技術に関する知的所有権を所有または管理しています。これらの製品、技術、および本書は、著作権法、特許権などの知的所有権に関する法律および国際条約により保護されています。

本書およびそれに付属する製品および技術は、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。オラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社およびそのライセンサーの書面による事前の許可なく、このような製品または技術および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。本書の提供は、明示的であるか黙示的であるかを問わず、本製品またはそれに付随する技術に関するいかなる権利またはライセンスを付与するものでもありません。本書は、オラクル社および富士通株式会社の一部、あるいはそのいずれかの関連会社のいかなる種類の義務を含むものでも示すものでもありません。

本書および本書に記述されている製品および技術には、ソフトウェアおよびフォント技術を含む第三者の知的財産が含まれている場合があります。これらの知的財産は、著作権法により保護されているか、または提供者からオラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社へライセンスが付与されているか、あるいはその両方です。

GPLまたはLGPLが適用されたソースコードの複製は、GPLまたはLGPLの規約に従い、該当する場合に、お客様からのお申し込みに応じて入手可能です。オラクル社および/またはその関連会社、および富士通株式会社にお問い合わせください。この配布には、第三者が開発した構成要素が含まれている可能性があります。本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされているBerkeley BSDシステムに由来しています。

UNIXはThe Open Groupの登録商標です。

OracleとJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。

富士通および富士通のロゴマークは、富士通株式会社の登録商標です。

SPARC Enterprise, SPARC64, SPARC64ロゴ、およびすべてのSPARC商標は、米国SPARC International, Inc.のライセンスを受けて使用している、同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

免責条項: 本書または本書に記述されている製品や技術に関してオラクル社、富士通株式会社および/またはそのいずれかの関連会社が行う保証は、製品または技術の提供に適用されるライセンス契約で明示的に規定されている保証に限ります。このような契約で明示的に規定された保証を除き、オラクル社、富士通株式会社および/またはそのいずれかの関連会社は、製品、技術、または本書に関して、明示、黙示を問わず、いかなる種類の保証も行いません。これらの製品、技術、または本書は、現状のまま提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われたいものとします。このような契約で明示的に規定されていないかぎり、オラクル社、富士通株式会社および/またはそのいずれかの関連会社は、いかなる法理論のもとで第三者に対しても、その収益の損失、有用性またはデータに関する損失、あるいは業務の中断について、あるいは間接的損害、特別損害、付随的損害、または結果的損害について、そのような損害の可能性が示唆されていた場合であっても、適用される法律が許容する範囲内で、いかなる責任も負いません。

本書は、「現状のまま」提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も、かかる免責が法的に無効とされた場合を除き、行われたいものとします。

目次

はじめに vii

第1章 ソフトウェア要件 1

XCP/Oracle Solarisおよび必須SRU/パッチ 1

XCPおよびOracle Solaris SRU/パッチ/Oracle VM Server for SPARCの入手 3

ウェブブラウザ 3

これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報 4

第2章 XCP 2080に関連する情報 5

XCP 2080の新着情報 5

留意点および制限事項 5

OpenBoot PROMに関する留意点 5

保守に関する制限事項 6

CPUメモリユニットやマザーボードユニットの保守に関する留意点 6

CPUコアアクティベーションに関する留意点 6

XSCF Webに関する留意点および制限事項 7

ファームウェアアップデートに関する留意点 8

PCIボックスを接続した構成の留意点 9

二系統受電設定に関する留意点 11

その他の留意点および制限事項 11

XCP 2080での不具合と回避方法 16

第3章 ソフトウェアに関する情報 17

留意点および制限事項	17
Oracle VM Server for SPARCに関する留意点	17
Opensslを使用する場合の留意点	18
リモート保守サービスに関する留意点	19
SNMPに関する留意点	19
XCPに関する不具合と回避方法	20
XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法	20
XCP 2080で解決された不具合	27
XCP 2070で解決された不具合	29
XCP 2052で解決された不具合	39
XCP 2051で解決された不具合	40
XCP 2050で解決された不具合	40
XCP 2050より前の版数で解決された不具合	45
Oracle Solarisに関する不具合と回避方法	61
すべてのバージョンのOracle Solarisに関する不具合と回避方法	61
Oracle Solaris 10に関する不具合と回避方法	69
第4章 SPARC M10-1のハードウェアに関する情報	71
留意点および制限事項	71
外付けDVDドライブの使用に関する留意点	71
USBメモリの使用に関する留意点	71
ハードウェアに関する不具合と回避方法	72
第5章 SPARC M10-4のハードウェアに関する情報	73
留意点および制限事項	73
外付けDVDドライブの使用に関する留意点	73
USBメモリの使用に関する留意点	73
ハードウェアに関する不具合と回避方法	74
第6章 SPARC M10-4Sのハードウェアに関する情報	75
留意点および制限事項	75
外付けDVDドライブの使用に関する留意点	75
USBメモリの使用に関する留意点	75
クロスバーボックスの交換に関する制限事項	76

拡張接続用ラック2の増設に関する制限事項	77
ハードウェアに関する不具合と回避方法	77
第7章 PCIボックスのハードウェアに関する情報	79
PCIボックスに対するダイレクトI/O機能	79
ダイレクトI/O機能を設定する／表示する	79
論理ドメインの構成情報およびOpenBoot PROM環境変数の退避／復元方法	80
PCIボックスに関する不具合と回避方法	86
すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法	87
PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合	88
PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合	89
PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合	89
第8章 マニュアルの変更内容	93
『SPARC M10-1 サービスマニュアル』の変更内容	93
『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』の変更内容	94
『SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアル』の変更内容	94

はじめに

本書では、最新のXSCF Control Package (XCP) の情報とともに、SPARC M10 システムのハードウェア、ファームウェア、ソフトウェア、およびドキュメントに関する重要かつ最新の情報について説明しています。

注—本書に対応したXCP版数より新しいXCPがリリースされている場合、最新のXCP版数に対応するマニュアルでのみ記載内容が更新されます。本書とともに、以下のウェブサイトで最新のXCP版数に対応するマニュアルを参照して、記載内容や使用方法など、ご使用のXCP版数に関連するマニュアルの訂正がないかご確認ください。

- 国内サイト
<http://jp.fujitsu.com/platform/server/sparc/manual/>
 - グローバルサイト
<http://www.fujitsu.com/global/services/computing/server/sparc/downloads/manual/>
-

なお、SPARC M10 システムは、Fujitsu M10という製品名でも販売されています。SPARC M10 システムとFujitsu M10は、同一製品です。

ここでは、以下の項目について説明しています。

- [対象読者](#)
- [本書の利用のしかた](#)
- [関連マニュアル](#)
- [廃棄・リサイクルについて](#)
- [マニュアルへのフィードバック](#)

対象読者

本書は、コンピュータネットワークおよびOracle Solarisの高度な知識を有するシステム管理者を対象にして書かれています。

本書の利用のしかた

本書は、SPARC M10 システムの、すべてのモデルを対象に書かれています。ご使用のサーバに応じて、以下の表に示すように、関連する項目をお読みください。

本書内の章タイトル	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S
第1章 ソフトウェア要件	○	○	○
第2章 XCP 2080に関連する情報	○	○	○
第3章 ソフトウェアに関する情報	○	○	○
第4章 SPARC M10-1のハードウェアに関する情報	○		
第5章 SPARC M10-4のハードウェアに関する情報		○	
第6章 SPARC M10-4Sのハードウェアに関する情報			○
第7章 PCIボックスのハードウェアに関する情報	○ (導入時)	○ (導入時)	○ (導入時)
第8章 マニュアルの変更内容	○	○	○

ファームウェア、ソフトウェアに関連する章（第1章、第2章、第3章）は、すべてのモデル共通の情報となっています。この中には、特定のモデルだけに関する記述も含まれています。この場合は、該当するモデル名が明記されています。

ハードウェアに関する情報は、モデルごとに独立した構成（第4章、第5章、第6章）となっています。このうち、すべてのモデルに共通する内容は、ハードウェアのすべての章に記載されています。そのため、複数のモデルのハードウェア情報を確認する場合は、記載内容が重複していることがあります。

PCIボックスに関する情報（第7章）は、PCIボックスを導入している場合にご確認ください。

マニュアルの変更内容（第8章）は、マニュアルごとに記載されています。お手持ちのマニュアルに変更内容があるかどうかご確認ください。

関連マニュアル

ご使用のサーバに関連するすべてのマニュアルはオンラインで提供されています。

- Oracle Solarisなどのオラクル社製ソフトウェア関連マニュアル
<http://www.oracle.com/documentation/>
- 富士通マニュアル
日本語サイト
<http://jp.fujitsu.com/platform/server/sparc/manual/>
グローバルサイト

注—本書で説明する情報は、SPARC M10 システム関連マニュアルの情報よりも優先されません。

次の表に、SPARC M10 システムに関連するマニュアルを示します。

SPARC M10 システム関連マニュアル (*1)

SPARC M10 システム はじめにお読みください/SPARC M10 Systems Getting Started Guide (*2)

SPARC M10 システム 早わかりガイド

SPARC M10 Systems Important Legal and Safety Information (*2)

Software License Conditions for Fujitsu M10/SPARC M10 Systems/ソフトウェアライセンス使用許諾条件

Fujitsu M10/SPARC M10 Systems Safety and Compliance Guide/安全に使用していただくために

SPARC M10 Systems Security Guide

SPARC M10システム/SPARC Enterprise/PRIMEQUEST共通設置計画マニュアル

SPARC M10 システム インストレーションガイド

SPARC M10-1 サービスマニュアル

SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル

SPARC M10 システム版PCIボックス サービスマニュアル

SPARC M10 システム PCIカード搭載ガイド

SPARC M10 システム システム運用・管理ガイド

SPARC M10 システム ドメイン構築ガイド

SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアル

SPARC M10 システム RCILユーザーズガイド (*3)

SPARC M10 システム プロダクトノート

SPARC M10 システム 用語集

*1: 掲載されるマニュアルは、予告なく変更される場合があります。

*2: 印刷されたマニュアルが製品に同梱されます。

*3: 特にSPARC M10システムとFUJITSU ETERNUSディスクストレージシステムを対象にしています。

『SPARC M10/SPARC Enterprise Software DVD』 DVD-ROMで提供されるマニュアル

注—Enhanced Support Facility (ESF) およびRemote Customer Support System (REMCS) は、日本国内で富士通から販売されたSPARC M10 システムにだけサポートされます。

リモート保守サービス

- Enhanced Support Facilityユーザーズガイド REMCS編 (J2X1-7753)

ファームウェアに関する情報

これは富士通のお客さま向けの情報です。

ご使用のサーバのファームウェアは、以下の方法で入手してください。

- 国内サイト
ファームウェアは、SupportDeskを契約されているお客さまにおかれましては、SupportDesk-Webから入手が可能です。
- グローバルサイト
ファームウェアの最新ファイルの入手方法については、営業担当者にお問い合わせください。

以下のファイルが提供されます。

- ファームウェアプログラムファイル (XSCF Control Package (XCP) ファイル)
- XSCF拡張MIB (XSCF-SP-MIB) 定義ファイル

注—XSCF Control Package (XCP) : XCPとは、SPARC M10 システムを構成するハードウェアの制御プログラムをパッケージ化したものです。XCPファイルには、XSCFファームウェア、OpenBoot PROMファームウェア、Power-On Self Testファームウェア、そしてハイパーバイザファームウェアが含まれます。

廃棄・リサイクルについて

注—この情報は、日本国内で富士通から販売されたSPARC M10 システムに適用されます。

製品の廃棄やリサイクル (有償) については、営業担当者にお問い合わせください。

マニュアルへのフィードバック

本書に関するご意見、ご要望がございましたら、マニュアル番号、マニュアル名称、ページおよび具体的な内容を、次のウェブサイトからお問い合わせください。

- 日本語サイト
<http://jp.fujitsu.com/platform/server/sparc/manual/>
- グローバルサイト
<http://www.fujitsu.com/global/services/computing/server/sparc/downloads/manual/>

第1章

ソフトウェア要件

ここでは、SPARC M10 システムを使用するために必要なソフトウェア要件について説明します。

- XCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチ
- XCPおよびOracle Solaris SRU／パッチ／Oracle VM Server for SPARCの入手
- ウェブブラウザ

XCP／Oracle Solarisおよび必須SRU ／パッチ

SPARC M10 システムでサポートされるXCP、Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチは、次のとおりです。

表 1-1 XCP／Oracle Solarisおよび必須SRU／パッチのサポート一覧

サーバ	XCP	Oracle Solaris	必須パッケージ(*4) 必須製品(*5)	必須SRU(*4) 必須パッチ(*5)
SPARC M10-1	2012以降	Oracle Solaris 11.1	system/ldoms(*1) system/ldoms/ldomsmanager(*2)	SRU1.4以降(*3)
		Oracle Solaris 10 1/13	Oracle VM Server for SPARC 3.0以降 (*3)	なし
SPARC M10-4	2012以降	Oracle Solaris 11.1	system/ldoms(*1) system/ldoms/ldomsmanager(*2)	SRU1.4以降(*3)
		Oracle Solaris 10 1/13	Oracle VM Server for SPARC 3.0以降 (*3)	なし
SPARC M10-4S (筐体間直結)	2031以降	Oracle Solaris 11.1	system/ldoms(*1) system/ldoms/ldomsmanager(*2)	SRU1.4以降(*3)
		Oracle Solaris 10 1/13	Oracle VM Server for SPARC 3.0以降 (*3)	なし

表 1-1 XCP/Oracle Solarisおよび必須SRU/パッチのサポーター一覧 (続き)

サーバ	XCP	Oracle Solaris	必須パッケージ(*4) 必須製品(*5)	必須SRU(*4) 必須パッチ(*5)
SPARC M10-4S (クロスバー ボックス経由 接続)	2043以降	Oracle Solaris 11.1	system/ldoms(*1) system/ldoms/ldomsmanager(*2)	SRU1.4以降(*3)
		Oracle Solaris 10 1/13(*6)	Oracle VM Server for SPARC 3.0以降 (*3)	なし

*1: 制御ドメインおよびゲストドメインに必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。

*2: 制御ドメインのみに必須です。group/system/solaris-large-serverおよびgroup/system/solaris-small-serverに含まれます。

*3: 制御ドメインのみに必須です。

*4: Oracle Solaris 11の場合。

*5: Oracle Solaris 10の場合。

*6: 制御ドメインでOracle Solaris 10 1/13を動作させる場合、制御ドメインに割り当て可能なCPUはLSB番号が0から7までの論理システムボードに搭載されたCPUです。ゲストドメインに割り当て可能なCPUはLSB番号の制限はありませんが、ゲストドメインでOracle Solaris 10 1/13を動作させた場合、1つのゲストドメインに割り当て可能なCPU (vcpu) の数は1024までです。

注—SPARC M10システムでOracle Solaris 11.1をDVDメディアからインストールする場合、または、Oracle Solaris 11.1をDVDメディアからブートする場合、以下の2種類のメッセージが出力されます。これらのメッセージはインストール作業には影響ありませんので、無視してください。

[メッセージ例1]

```
Dec 21 02:18:22 solaris genunix: NOTICE: core_log: ldmd[1978] core dumped: /tmp/core
Dec 21 02:18:22 solaris svc.startd[9]: ldoms/ldmd:default failed fatally: transitioned to
maintenance (see 'svcs -xv' for details)
```

[メッセージ例2]

```
SUNW-MSG-ID: SMF-8000-YX, TYPE: defect, VER: 1, SEVERITY: major
EVENT-TIME: Fri Dec 21 02:18:50 UTC 2012
PLATFORM: ORCL,SPARC64-X, CSN: 2081210008, HOSTNAME: solaris
SOURCE: software-diagnosis, REV: 0.1
EVENT-ID: 5cf4edb8-0613-cbe0-acb1-a9a28a2fac10
DESC: A service failed - a start, stop or refresh method failed.
AUTO-RESPONSE: The service has been placed into the maintenance state.
IMPACT: svc:/ldoms/ldmd:default is unavailable.
REC-ACTION: Run 'svcs -xv svc:/ldoms/ldmd:default' to determine the generic reason why
the service failed, the location of any logfiles, and a list of other services impacted. Please
refer to the associated reference document at http://support.oracle.com/msg/SMF-8000-YX
for the latest service procedures and policies regarding this diagnosis.
```

注—SPARC M10 システムにOracle Solaris 11.1をインストールした場合、Oracle Solaris起動時に以下のようなメッセージが出力されます。

[メッセージ例]

```
WARNING: failed to instantiate provider ldmd for process 753
```

```
WARNING: failed to instantiate provider ldmd for process 753
```

```
Sep 24 06:15:59 svc.startd[11]: svc:/ldoms/ldmd:default: Method "/opt/SUNWldm/bin/ldmd_start" failed with exit status 95.
```

```
Sep 24 06:15:59 svc.startd[11]: ldoms/ldmd:default failed fatally: transitioned to maintenance (see 'svcs -xv' for details)
```

Oracle Solaris 11.1をインストールしたあと、SRU1.4以降を適用してください。

Oracle VM Server for SPARCパッケージがSPARC M10 システムに対応した版数に更新され、このメッセージは出力されなくなります。

その他のOracle Solarisの情報については、「[Oracle Solarisに関する不具合と回避方法](#)」を参照してください。

XCPおよびOracle Solaris SRU／パッチ／Oracle VM Server for SPARCの入手

最新のXCPファームウェア、およびOracle Solaris SRU／パッチ／Oracle VM Server for SPARCは、SupportDeskを契約されているお客さまにおかれましては、SupportDesk-Webから入手が可能です。

ウェブブラウザ

XSCF Webの動作が確認されているウェブブラウザは、表 1-2のとおりです。その他のXSCF Webの情報については、「[XSCF Webに関する留意点および制限事項](#)」を参照してください。

表 1-2 動作確認済みのウェブブラウザのバージョン

ウェブブラウザ	バージョン
Microsoft Internet Explorer	8.0および9.0
Firefox	10.0以降

これまでのXCPファームウェア版数とサポート情報

SPARC M10システムで過去に公開されたXCPファームウェア版数と各版数でのおもなサポート更新情報は、次のとおりです。

表 1-3 過去に公開されたXCP版数とサポート情報

XCP版数	おもなサポート情報
XCP 2080	64 GBメモリのサポート
XCP 2070	XCPファームウェア不具合の改善
XCP 2052	SNMPエージェント機能に対するAESアルゴリズムの暗号化機能のサポート 筐体内での、メモリの混在化のサポート
XCP 2051	XCPファームウェア不具合の改善
XCP 2050	PCIボックスに対するダイレクトI/O機能のサポート (SPARC M10-4S)
XCP 2044	PCIボックスに対するダイレクトI/O機能のサポート (SPARC M10-1/M10-4)
XCP 2042	クロスパーボックスのサポート (最大16BB構成)
XCP 2041	PCIボックスのサポート
XCP 2032	Oracle VM Server for SPARCソフトウェアに関連する改善
XCP 2031	SPARC M10-4Sのサポート (最大4BB構成)
XCP 2013	XCPファームウェア不具合の改善
XCP 2012	SPARC M10-1/M10-4のサポート

第2章

XCP 2080に関する情報

ここでは、XCP 2080に関する情報について説明します。

- [XCP 2080の新着情報](#)
- [留意点および制限事項](#)
- [XCP 2080での不具合と回避方法](#)

XCP 2080の新着情報

ここでは、XCP 2080で新規に追加された機能を説明します。

- 64 GBメモリがサポートされるようになりました。
64 GBメモリを増設する場合は、XCP 2080以降を適用してください。
- 外部メディアからのOracle Solarisのインストール方法が『SPARC M10システムシステム運用・管理ガイド』に追加されました。
- Auto Service Request (ASR) 機能がサポートされるようになりました。
ASR機能の詳細は、関連するオラクルのマニュアルを参照してください。

留意点および制限事項

ここでは、本リリース時点でわかっている留意点および制限事項について説明します。

OpenBoot PROMに関する留意点

- ドメインコンソールでOpenBoot PROMのバナーを表示したあと、OpenBoot PROMの起動が完了する前にsendbreak(8)コマンドを実行すると、以下のエラーメッセージが出力され、以降、bootコマンドが実行できなくなります。
FATAL: OpenBoot initialization sequence prematurely terminated.

この場合は、okプロンプトでOpenBoot PROM環境変数auto-boot?をfalseに設定したあと、reset-allコマンドを実行してください。OpenBoot PROMが再起動されたら、auto-boot?をtrueに設定し、bootコマンドを実行してください。

- XSCFファームウェアのsetpparparam(8)コマンドを使用して、nvramrcなどのOpenBoot PROM環境変数を設定する場合、設定できる最大文字数は254文字です。nvramrcなどのOpenBoot PROM環境変数に255文字以上の文字列を設定したい場合は、OpenBoot PROMまたはOracle Solarisの環境で設定してください。ただし、最大文字数は1024文字です。
- Oracle VM Server for SPARCのディスク、ネットワークが割り当てられていない論理ドメインは、OpenBoot PROMのデバイスエイリアスdisk、netが作成されません。デバイスエイリアスdisk、netを指定してディスクブートまたはネットワークブートを実行する場合は、OpenBoot PROMのnvaliasコマンドを使用して、デバイスエイリアスdisk、netを設定してください。

保守に関する制限事項

- 『SPARC M10 システム インストールガイド』で説明されている以下の項は現時点ではサポートされていません。
 - 「9.2.1 対象の物理パーティション (PPAR) が動作した状態で増設する」
 - 「10.2.1 対象の物理パーティション (PPAR) が動作した状態で減設する」
- 『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』で説明されている「活性/停電」に関する保守作業（物理パーティション (PPAR) が動作した状態での保守作業）は現時点ではサポートされていません。
- 『SPARC M10システム ドメイン構築ガイド』で説明されているPPAR内のシステムボードの動的再構成機能は、現時点ではサポートされていません。

CPUメモリユニットやマザーボードユニットの保守に関する留意点

CPUメモリユニット下段 (CMUL) またはマザーボードユニット (MBU) を交換した場合、CPUコアアクティベーション設定情報およびCPUコアアクティベーションキーが消去されてしまう可能性があります。CPUコアアクティベーション設定情報およびCPUコアアクティベーションキーを元に戻すには、dumpconfig(8)コマンドで退避しておいたCPUコアアクティベーション設定情報およびCPUコアアクティベーションキーをrestoreconfig(8)コマンドで復元する必要があります。

CPUコアアクティベーションに関する留意点

- XCP 2032以前では、restoredefaults(8)コマンドを実行してXSCFの設定情報を初期化すると、CPUコアアクティベーションキーの情報も初期化されます。restoredefaults(8)コマンドを実行する場合は、あらかじめCPUコアアクティベーションキーを保存してから復元するか、CPUコアアクティベーションキーを再登

録してください。

- XCP 2041以降、`restoredefaults -c xscf`コマンドを実行すると、CPUコアアクティベーションキーの情報は、XSCFユニット側だけでなくXSCFのバックアップ情報側も消去されます。また、`restoredefaults -c factory`コマンドを実行しても、CPUコアアクティベーションキーの情報は消去されません。CPUコアアクティベーションキーの情報も含めて出荷時の状態に初期化する場合、`-c factory -r activation`オプションを使用してください。

`restoredefaults(8)`コマンドの変更内容は、『[『SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアル』の変更内容](#)』を参照してください。

- `dumpconfig(8)`コマンドで退避したXSCF設定情報には、CPUコアアクティベーション情報およびCPUコアアクティベーションキーが含まれます。`dumpconfig(8)`コマンドで退避しておいたCPUコアアクティベーション情報およびCPUコアアクティベーションキーを`restoreconfig(8)`コマンドで復元できます。そのため、XSCFネットワークや物理パーティション (PPAR) の構築など、XSCFの設定とともに、CPUコアアクティベーションの設定およびCPUコアアクティベーションキーのインストールを行った場合は、`dumpconfig(8)`コマンドを使用して、CPUコアアクティベーション情報およびCPUコアアクティベーションキーを退避しておくことをお勧めします。CPUコアアクティベーションキーのみを退避する場合は`dumpcodactivation(8)`、復元する場合は`restorecodactivation(8)`コマンドで実行できます。ただし、CPUコアアクティベーション情報の退避／復元はできません。`showcod(8)`および`setcod(8)`コマンドを使用して、CPUコアアクティベーションを設定しなおしてください。

XSCF Webに関する留意点および制限事項

留意点

(1) ブラウザ共通

- XSCF Webを使用し、XCPのインポートまたはファームウェアをアップデートする場合、ウェブブラウザ上に「Session is invalid」が表示されることがあります。
- XSCF Webを使用してXCPをインポートする場合、XSCFシェルのタイムアウト時間が短いと、XCPのインポートに失敗します。XSCFシェルのタイムアウト時間を30分以上に設定してください。
[menu]タブを選択し、[XSCF]-[Settings]-[Autologout]メニューを選択し、[Time-out value]に、30分以上の値を設定してください。

(2) Internet Explorer

現時点で確認されている留意点はありません。

(3) Firefox

- Firefox環境下でXSCF Webを使用する場合、XSCFログイン時に、ブラウザからログインID／パスワードの保存を要求されることがあります。このときログインID／パスワードを保存しないでください。ログインID／パスワードを保存すると、保存されたデータがLDAP、SMTP、およびREMCSのWebページに表示されてしまうことがあります。

以下のどちらかを設定して、ブラウザのログインID/パスワード保存機能を無効にしてください。

- ブラウザ全体のログインID/パスワード保存機能を無効にする[ツール]-[オプション]-[セキュリティ]タブにある[パスワード]-「サイトのパスワードを保存する」のチェックを外します。
- ログインID/パスワード保存の例外サイトに指定する[ツール]-[オプション]-[セキュリティ]タブにある[パスワード]-[サイトのパスワードを保存する]をチェックしたあと、XSCFログイン時に出力されるID/パスワード保存のためのダイアログにある、[このサイトでは記憶しない]ボタンをクリックします。これにより、ID/パスワード保存の[例外サイト]リストにXSCFのアドレスが登録され、以降のXSCFへのログイン時に、ID/パスワード保存のためのダイアログが出力されなくなります。

制限事項

- (1) **ブラウザ共通**
現時点で確認されている制限はありません。
- (2) **Internet Explorer**
Windows 7環境下でInternet Explorer 8を使用した場合、ビルトインAdministratorアカウントを使用できません。
- (3) **Firefox**
現時点で確認されている制限はありません。

ファームウェアアップデートに関する留意点

- [SPARC M10-4S]
flashupdate(8)コマンドまたはXSCF Webによるファームウェアアップデートは、システムを構成しているSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスの台数に応じて、処理時間がかかります。
- XSCFファームウェアをアップデートしたあとのマスタXSCFおよびスタンバイ状態のXSCFの関係は、アップデートするXCP版数によって異なります。XCP版数によるマスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFの関係、およびファームウェアアップデートの動作の例は以下の表のとおりです。

表 2-1 XCP 2050以降とXCP 2044以前のファームウェアアップデートの違い

XCP版数	マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFの関係	ファームウェアアップデート内での動作の例
XCP 2050以降	アップデート中に切り替わったマスタXSCFおよびスタンバイ状態のXSCFは、切り替わる前の状態に戻る。	<ol style="list-style-type: none"> 1. BB#00のマスタXSCFからflashupdate(8)コマンドを実行する。 <ul style="list-style-type: none"> → XSCFリセット直後、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFはスタンバイ状態になっている。 → アップデートが完了すると、XSCFの自動切り替え処理が実施される。 → XSCFの自動切り替え処理が終了すると、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFは元のマスタの状態に戻される。 2. BB#00のマスタXSCFからアップデートの完了をログメッセージで確認する。
XCP 2044以前	アップデート中に切り替わったマスタXSCFおよびスタンバイ状態のXSCFは、切り替わったままの状態となる。	<ol style="list-style-type: none"> 1. BB#00のマスタXSCFからflashupdate(8)コマンドを実行する。 <ul style="list-style-type: none"> → XSCFリセット直後、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFはスタンバイ状態になっている。 → アップデートが完了しても、XSCFの自動切り替え処理は実施されない。そのため、flashupdate(8)コマンドを実行したBB#00のXSCFは、スタンバイ状態のままになっている。 2. BB#01のマスタXSCFからアップデートの完了をログメッセージで確認する。 3. マスタとスタンバイ状態のXSCFをアップデート前の状態に戻す場合、BB#01のマスタXSCFから、switchscf(8)コマンドを実行して、BB#00のXSCFをマスタに戻す。

- ファームウェアアップデートを行うさい、「**XCPに関する不具合と回避方法**」の項にある不具合が発生している場合、回避方法に対処が記載されているときは、それを実施して不具合を回避してください。その後、ファームウェアアップデートを実施してください。

PCIボックスを接続した構成の留意点

- [SPARC M10-1]
 - 以下のどちらかの場合、次回起動時に、物理パーティション (PPAR) の論理ドメイン構成はfactory-defaultの状態に戻ります。また、論理ドメインの構成にゲストドメインが含まれる場合、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数も初期化されます。
 - PCIボックスを接続した構成で、XCP 2043以前のファームウェアからXCP 2044以降のファームウェアにアップデートする場合
 - XCP 2044以降のファームウェアのシステムにPCIボックスを増設/減設する場

合

事前にOracle Solarisから論理ドメイン構成情報をXMLに保存してください。XMLへの保存はldm list-constraints -xコマンド、XMLからの復元はldm init-system -iコマンドを実行します。また、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数の設定情報

を事前にメモに保存し、再設定してください。表示方法はokプロンプト状態からprintenvコマンドを実行します。これらの詳細な手順は、「[論理ドメインの構成情報およびOpenBoot PROM環境変数の退避／復元方法](#)」を参照してください。

PCIボックス構成に関連した各情報の退避／復元が必要な場合は、以下の表のとおりです。

表 2-2 PCIボックス構成に関連した必要な作業

PCIボックスの搭載	ドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
なし	factory-default	不要	不要
なし	ゲストドメインあり	不要	不要
あり	factory-default	不要	不要
あり	ゲストドメインあり	要 (XML)	要

■ [SPARC M10-4/M10-4S]

SPARC M10-4ではXCP 2044以降、SPARC M10-4SではXCP 2050以降のファームウェアを使用し、setpciboxdio(8)コマンドで以下のどちらかの作業を実施すると、次回起動時に、物理パーティション (PPAR) の論理ドメイン構成はfactory-defaultの状態に戻ります。また、ドメインの構成にゲストドメインが含まれる場合、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数も初期化されます。

- PCIボックスのダイレクトI/O機能の、有効／無効の設定を変更する場合
- PCIボックスのダイレクトI/O機能を有効にしたPCIスロットに対して、PCIボックスを増設／減設／交換した場合

事前にOracle Solarisから論理ドメイン構成情報をXMLに保存してください。XMLへの保存はldm list-constraints -xコマンド、XMLからの復元はldm init-system -iコマンドを実行します。また、制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数も設定情報を事前にメモに保存し、再設定してください。表示方法はokプロンプト状態からprintenvコマンドを実行します。これらの詳細な手順は、「[論理ドメインの構成情報およびOpenBoot PROM環境変数の退避／復元方法](#)」を参照してください。

setpciboxdio(8)コマンドを実行してPCIボックスのダイレクトI/O機能の、有効／無効の設定を変更するときに、各情報の退避／復元が必要な場合は、以下の表のとおりです。

表 2-3 setpciboxdio コマンドを実行し有効、無効の設定を切り替える場合の作業

PCIボックスの構成	ドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
あり／なし	factory-default	不要	要
あり／なし	ゲストドメインあり	要 (XML)	要

setpciboxdio(8)コマンドを実行してPCIボックスのダイレクトI/O機能を有効にしたPCIスロットに対してPCIボックスの増設/減設/交換を実施する場合、各情報の退避/復元が必要な場合は、以下の表のとおりです。

注一PCIホットプラグ (PHP) 機能によりPCIボックスを保守する場合、ダイレクトI/O機能は無効なため、各情報の退避/復元は必要ありません。

表 2-4 ダイレクトI/O機能を有効にしたPCIスロットに対してPCIボックスを増設/減設/交換した場合の作業

保守環境	ドメインの構成	Oracle VM Server for SPARC configの再構築	OpenBoot PROM環境変数の再設定
PPARを停止して増設/減設した場合	factory-default ゲストドメインあり	不要 要 (XML)	不要 要
PPARを停止して故障したPCIボックス(*)を交換した場合	factory-default ゲストドメインあり	不要 要 (XML)	不要 要
PPARを停止して正常なPCIボックス(*)を交換した場合	factory-default ゲストドメインあり	不要 不要	不要 不要

*: リンクカード、リンクケーブル、マネジメントケーブル、リンクボードを交換した場合も含まれます。

二系統受電設定に関する留意点

SPARC M10システムの電源ユニットは、冗長構成です。setdualpowerfeed(8)コマンドにより二系統受電機能を有効/無効のどちらかに設定しても、冗長構成のシステム挙動に影響はありません。

したがって、setdualpowerfeed(8)コマンドの設定に依存したshowdualpowerfeed(8)コマンドおよびshowhardconf(8)コマンドの表示結果が以下のいずれの場合においても、冗長構成のシステム挙動に影響はありません。

- showdualpowerfeed(8)コマンドで「Dual power feed is enabled.」のとき、showhardconf(8)コマンドで「Power_Supply_System: Dual ;」と表示される場合
- showdualpowerfeed(8)コマンドで、「Dual power feed is disabled.」のとき、showhardconf(8)コマンドで「Power_Supply_System: Single ;」と表示される場合

この設定機能は、二系統受電での構成かどうかの、システム管理者用のメモとして利用できます。

その他の留意点および制限事項

留意点

- オペレーションパネルのモードスイッチがServiceモードのときは、オペレーショ

ンパネルの電源スイッチを使用して電源を投入することはできません。オペレーションパネルの電源スイッチから電源を投入する場合は、オペレーションパネルのモードスイッチをLockedモードに切り替えてください。

- 64 GBメモリを増設する場合は、XCP 2080以降を適用してください。
- [SPARC M10-1/M10-4/M10-4S]
TelnetおよびSSHでXSCFへ同時に接続できる最大ユーザー数は、以下のとおりです。
 - M10-1: 20ユーザー
 - M10-4: 40ユーザー
 - M10-4S (クロスバーボックスなし) : 40ユーザー
 - M10-4S (クロスバーボックスあり) : 70ユーザー最大ユーザー数を超えた場合、アクセスは拒否されます。
- XSCF-LANはオートネゴシエーションに対応しています。XSCF-LANと全二重固定で設定されているネットワーク機器を接続した場合、IEEE802.3の規約によって、XSCF-LANは半二重モードで通信します。これにより、ネットワークの通信速度が遅くなったり、通信異常が発生したりする場合があります。XSCF-LANと接続するネットワーク機器は、必ずオートネゴシエーションに設定してください。
- `setdualpowerfeed(8)`コマンドの設定は即時反映されるため、XSCFをリセットする必要ありません。
- `ioxadm poweroff(8)`コマンドで-fオプションと一緒に指定できるのは、電源ユニットだけです。
- `setupfru(8)`コマンドのメモリミラー設定は、対象のシステムボード (PSB) が属する物理パーティション (PPAR) の、電源が切断されている状態で行ってください。
- マニュアルページを表示する場合は、ターミナルソフトの設定をTERM=vt100としてください。
- 物理パーティション (PPAR) を構築する場合、システムに存在しないBB-IDをPPAR-IDに設定しないでください。
例えば、システムに存在するBB-IDが00と01の場合、設定できるPPAR-IDは00または01です。PPAR-IDに02を設定すると、PPAR-ID 02に設定されたPPARは起動できなくなります。
- `showhardconf(8)`コマンドを実行して表示される情報のうち、ゲストドメインのPCI Express (PCIe) カード情報は、該当するゲストドメインのOracle Solarisが起動したあとに反映されます。
- XCP 2032以降、`setpparmode(8)`コマンドで設定する省電力動作のデフォルト値は、「有効」から「無効」に変更されます。
- `testsb(8)`または`diagxbu(8)`コマンドを実行すると、エラーログの被疑箇所に「PPAR#30」と、存在しないPPAR-IDが表示されることがあります。これは、診断時にシステムボード (PSB) の異常が検出されたことを示します。出力されたPPAR-IDは何も意味も持ちません。
- 制御ドメインコンソールに接続する場合は、XSCF-LANポート経由で接続することを推奨します。
シリアルポート経由で制御ドメインコンソールに接続して大量のデータを出力させると、正しく表示されないことがあります。
- [SPARC M10-4S]

showhardconf(8)コマンド、showboards(8)コマンド、showpparstatus(8)コマンドなど、システムの構成や状態を表示するコマンドは、システムを構成しているSPARC M10-4Sやクロスバーボックスの台数に応じて、処理時間がかかります。

- [SPARC M10-4S]
複数の筐体で構成されているシステムの場合、BB#01またはXBBOX#81の筐体が、はじめにマスタXSCFになることもあります。
- [SPARC M10-4S]
システム構成によっては、リポートに時間がかかることがあります。
- XCP 2032をインストールしたSPARC M10-4SにSPARC M10-4Sを増設する場合は、事前に最新のファームウェアにアップデートしてください。
- setsnmpvacm(8)コマンドのオペランドにcreateviewを指定して実行すると、MIBのOIDマスクを使用したアクセスの制限ができません。setsnmpvacm(8)コマンドのオペランドにcreateviewを指定して実行する場合は、MIBのOIDマスクを使用しないでください。
- 複数の電源連動グループに、同じノードを登録しないでください。1つのノードを複数の電源連動グループに登録して電源連動を行うと意図しない動作となることがあります。
なお、setremotepwrmgmt(8)コマンドでは、複数の電源連動グループにノードが登録されているかどうかを確認することはできません。電源連動グループ管理情報ファイルを作成、修正するときに重複しないように注意してください。
- I/Oノードを、複数の電源制御グループに登録しないでください。複数の電動連動グループに同じI/Oノードを設定し以下の両方の条件を満たすと、I/Oノードの電源がオン/オフを交互に繰り返します。
 - setremotepwrmgmt -c enableを実行し、電源連動機能が有効である。
 - 1台以上のホストノードが電源オンである電源制御グループと、すべてのホストノードが電源オフである電源制御グループが存在する。I/Oノードを複数の電源制御グループに登録してしまった場合は、setremotepwrmgmt -c disableで電源連動を無効にしたあと、clearremotepwrmgmtで電源制御グループの設定を削除してください。削除後、複数のグループに登録されないように電源連動グループ管理情報ファイルを作成してから、setremotepwrmgmt -c configで再度登録してください。
- 引き続きIPアドレスを設定している場合は、SNMPv1のSNMP Trapの、UDPパケットの送信元IPアドレスとAgent Addressが異なります。UDPパケットの送信元IPアドレスには各XSCF-LANに割り当てたIPアドレス（物理IPアドレス）が、Agent Addressには引き続きIPアドレス（仮想IPアドレス）が格納されます。
- 2 CPUが搭載されたSPARC M10-4またはSPARC M10-4SでI/Oバス再構成を有効に設定しているとき、2 CPUを追加するためにCPUメモリユニット（CMU）を増設すると、それまで使用していたI/Oデバイスのデバイスパスが変化します。
setpparmode(8)コマンドの-m functionオプションで設定できるioreconfigureは、通常、デフォルトのfalseを指定し、I/Oバス再構成機能を無効にしてください。
ioreconfigureにtrueを指定して、I/Oバス再構成機能を有効にすると、Oracle Solarisの再インストールが必要になることがあります。
- Oracle Solaris 11が動作している論理ドメインの場合、XCP 2050以降にアップデートすることにより、1つのルートコンプレックス（RC）に搭載できるPCIeカードの最大搭載枚数を増やすことができます。

XCP 2050以降にアップデートしたあとPCIeカードを増設する場合は、制御ドメインで以下の作業を実施してください。

ここでは現在使用中の構成情報ldm-set1と、factory-defaultの、2つの構成情報が保存されている例で説明します。

1. XSCFに保存された論理ドメインの構成情報を確認します。

```
primary# ldm list-spconfig
ldm-set1 [current]
factory-default
```

2. 制御ドメインを含む、すべての論理ドメインに対して、以下のコマンドを実行します。

ldmには論理ドメイン名を指定します。

```
primary# ldm set-variable fix_atu=true <ldom>
primary# ldm remove-variable fix_atu <ldom>
```

3. 変更された内容で論理ドメインの構成情報を保存しなおします。
保存されているldm-set1をいったん削除してから、保存しなおします。

```
primary# ldm rm-spconfig ldm-set1
primary# ldm add-spconfig ldm-set1
```

4. すべての論理ドメインを再起動します。

制限事項

- setpcl(8)コマンドの-sオプションで設定されるno-mem、no-ioは、現時点ではサポートされていません。
- XSCFとハイパーバイザ間のAlive監視機能はサポートされていません。XSCFとハイパーバイザ間のAlive監視機能は、setpparmode(8)コマンドを使用しても、有効／無効を設定できません。
- [SPARC M10-4S]
2台以上で構成されたSPARC M10-4Sで、制御ドメインコンソール接続中にXSCFの切り替えが発生したあと、切り替わったマスタXSCFに制御ドメインコンソールを接続しなおそうとすると、すべてのSPARC M10-4Sの筐体が再起動するまで制御ドメインコンソールに接続できないことがあります。
XSCFの故障が原因ですべてのXSCFが再起動できていない場合は、再度、制御ドメインコンソールに接続してください。制御ドメインコンソールに接続できない場合は、故障しているXSCFユニットまたはCPUメモリユニット（下段）を交換してください。
- [SPARC M10-4S]
2台以上で構成されたSPARC M10-4Sで、あるXSCFの故障のためにすべてのXSCFが再起動できていない場合、poweroff(8)コマンドやreset(8)コマンドを実行しても、正常に動作しないことがあります。
物理パーティション（PPAR）の電源を切断する場合は、PPARの制御ドメインに

ログインしてOracle Solarisのshutdown(1M)コマンドを実行して、その後、XSCFファームウェアのpoweroff -fコマンドを使用してPPARの電源を切断してください。この状態でreset(8)コマンドは使用できません。

- setpowerupdelay(8)コマンドにある空調待ち時間を設定するための-c waitは、現時点ではサポートされていません。
- システムボード (PSB) の動的再構成 (DR) 機能のサポート情報については、担当営業にご確認ください。
動的再構成に関連するコマンドオプションは以下のとおりです。
 - addboard(8)コマンドの-c configure
 - deleteboard(8)コマンドの-c disconnect (PPARの電源が投入されている場合)
 - deleteboard(8)コマンドの-c unassign (PPARの電源が投入されている場合)
 - setpparmode(8)コマンドのPPAR DR機能
- diagxbu(8)コマンドの-pオプションは、現時点ではサポートされていません。
- replacefru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの交換は、現時点ではサポートされていません。クロスバーボックスの交換方法は「第6章 SPARC M10-4Sハードウェアに関する情報」の「[クロスバーボックスの交換に関する制限事項](#)」を参照してください。
- addfru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの増設は、現時点ではサポートされていません。クロスバーボックスの増設方法は「第6章 SPARC M10-4Sハードウェアに関する情報」の「[拡張接続用ラック2の増設に関する制限事項](#)」を参照してください。
- [SPARC M10-4S]
複数の物理パーティション (PPAR) で構成されたシステムに対して、poweron (8)コマンドですべてのPPARの電源を投入するとき、PPARを指定した電源投入は、-aを指定した一括電源投入よりも起動時間がかかります。
- [SPARC M10-4/M10-4S]
setpparmode(8)コマンドの-m functionで指定できるioreconfigureは、デフォルトであるfalseのままとし、I/Oバス再構成機能を無効にしてください。ioreconfigureにtrueを指定して、I/Oバス再構成機能を有効にすると、Oracle Solarisの再インストールが必要になることがあります。
- [SPARC M10-4S]
showhardconf -Mを実行した場合、以下の両方を満たす条件下で1画面ずつ表示できないことがあります。showhardconf -Mを実行しないでください。
 - 2BB以上で構成されたシステム
 - 1台以上のSPARC M10-4Sが、rebootxscf(8)コマンドによるXSCFリセット中のため、通信できない状態にある
- [SPARC M10-1]
物理パーティション (PPAR) の電源が投入されている状態で、XCP 2070版以前のファームウェアにアップデートすると、論理ドメインが停止することがあります。
必ず、物理パーティション (PPAR) の電源が切断されている状態で、ファームウェアをアップデートしてください。この不具合の詳細は、「[XCP 2070で解決された不具合](#)」の「RTIF2-131004-001」を参照してください。

XCP 2080での不具合と回避方法

XCP 2080で発生しうるXCPの不具合については、「[XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法](#)」を、XCP 2080で解決されたXCPの不具合については、「[XCP 2080で解決された不具合](#)」を参照してください。

ソフトウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10 システムのソフトウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
 - XCPに関する不具合と回避方法
 - Oracle Solarisに関する不具合と回避方法
-

留意点および制限事項

Oracle VM Server for SPARCに関する留意点

- Oracle VM Server for SPARCで論理ドメインを再構成したあと、`ldm add-spconfig`コマンドを実行する前に、XSCFファームウェアの`reset(8)`コマンドでゲストドメインを操作すると、指定したゲストドメイン以外のゲストドメインがリセットされることがあります。または、指定したゲストドメインがリセットされません。`ldm add-spconfig`コマンドで論理ドメインの構成を保存してください。保存する前にゲストドメインをリセットする場合は、XSCFからではなく、制御ドメインから`ldm stop`コマンドを実行してください。
- 次回起動時の論理ドメインの構成を指定する場合は、`ldm add-spconfig -r`ではなく、`ldm set-config`コマンドを使用してください。
`ldm add-spconfig -r`コマンドを使用して、次回起動時の論理ドメインの構成を指定した場合、XSCFファームウェアの`reset(8)`コマンドでゲストドメインを操作すると、指定したゲストドメイン以外のゲストドメインがリセットされることがあります。
- Oracle VM Server for SPARCで、`ldm migrate-domain` コマンドを実行した場合、XSCFで以下の問題が発生します。
 - `showdomainstatus(8)`コマンドを実行すると、移行先のゲストドメインのステータスが"Unknown"で表示されます。
 - `poweroff(8)`コマンドを使用して物理パーティション (PPAR) の電源を切断し

た場合、いずれかのゲストドメインが正しくシャットダウンされないことがあります。

- `reset(8)`コマンドを使用してゲストドメインをリセットした場合、指定したゲストドメイン以外のゲストドメインがリセットされることがあります。ゲストドメインをリセットする場合は、XSCFからではなくゲストドメインから実行してください。
- SNMP設定している場合、Trap通知されたゲストドメイン名が誤っていることがあります。
- `ldm migrate-domain` コマンドによるマイグレーションでは、移行元の論理ドメインがOpenBoot PROMの状態の場合はサポートされません。移行元の論理ドメインを以下のどちらかの状態にしたうえで、`ldm migrate-domain` コマンドによるマイグレーションを実施してください (CR 15858731)。
 - 停止状態 (bound状態)
 - Oracle Solarisを起動した状態
- 制御ドメインのldmdサービス (`svc:/ldoms/ldmd:default`) は、必ず起動してください。

Opensslを使用する場合の留意点

Oracle SolarisはSPARC M10システム用の暗号化ライブラリを提供します。このライブラリは、OpenSSLのPKCS11エンジンを使うことで利用できます。詳細は`openssl(5)`、`engine(3openssl)`、`evp(3openssl)`のマニュアルページを参照するか、以下のOpenSSLのドキュメントを参照してください。

<http://www.openssl.org/docs/crypto/engine.html>

<http://www.openssl.org/docs/crypto/evp.html>

なお、以下の点にご注意ください。

- OpenSSLにおいてSPARC64 Xプロセッサの暗号演算ユニットのアクセラレーション機能を動作させるためには、PKCS11エンジンが必要です。
- Oracle SolarisでOpenSSLのPKCS11エンジンを実行させるためには、エンジンでサポートされているダイジェストと暗号メソッドのEVPモデルを有効にしてください。
 - SPARC64 Xプロセッサ用に最適化されたダイジェストメソッドは以下のとおりです。
SHA1, SHA224, SHA256, SHA384, SHA512
 - SPARC64 Xプロセッサ用に最適化された暗号化メソッドは以下のとおりです。
DES-CBC, DES-EDE3-CBC, DES-ECB, DES-EDE3
AES-128-CBC, AES-192-CBC, AES-256-CBC
AES-128-ECB, AES-192-ECB, AES-256-ECB
AES-128-CTR, AES-192-CTR, AES-256-CTR

以下はSPARC64 Xプロセッサで最適化されたAES-256-CBCメソッドを呼び出すコマンドの例です。

```
# openssl speed -engine pkcs11 -evp AES-256-CBC
```

- OpenSSLライブラリ (libssl, libcrypto) を使用しているアプリケーションで、PKCS11エンジンの最適化されたダイジェストメソッドや暗号メソッドを使うためには、evp(3openssl)で説明されているEVPインターフェースを有効にしてください。

リモート保守サービスに関する留意点

注—Enhanced Support Facility (ESF) およびRemote Customer Support System (REMCS) は、日本国内で富士通から販売されたSPARC M10システムにだけサポートされます。

ここでは、リモート保守サービスを使用する場合の留意点について説明します。REMCSの設定方法および使用方法については、『Enhanced Support Facilityユーザーズガイド REMCS編』を参照してください。

リモート保守サービスの設定の前に

SPARC M10 システムでリモート保守サービスを使用するには、XSCF WebでREMCSエージェント機能に関する設定を行う必要があります。また、REMCSエージェントでは、XSCFのタイムゾーン情報を使用します。事前に、XSCFシェルで以下の設定を済ませておいてください。

- HTTPS設定を有効にするなど、XSCF Webを使用するために必要な設定
- XSCFのタイムゾーン設定

上記の設定が完了したら、XSCF WebでREMCSエージェント機能に関する設定を行ってください。

なお、XSCF Webの設定、タイムゾーン設定の詳細は、『SPARC M10 システムシステム運用・管理ガイド』を参照してください。

REMCSエージェント機能のタイムゾーンについて

REMCSエージェントでは、現在システムで設定されているタイムゾーンを使用します。このため、XSCFでシステムのタイムゾーンを変更した場合、REMCSセンターの情報を更新するために、定期接続スケジュールを設定しなおしてください。

SNMPに関する留意点

SNMPv3エージェントを使用する場合、setsnmp(8)コマンドによる認証プロトコルと暗号化プロトコルの設定を行ったあとは、setsnmpusm(8)コマンドによるUser-based Security Model (USM) 管理情報の設定、およびsetsnmpvacm(8)コマンドによるView-based Access Control Model (VACM) 管理情報の設定も、必ず実施してください。SNMPv3の設定では、認証プロトコルおよび暗号化プロトコルの指定は必須となります。また、setsnmp(8)およびsetsnmpusm(8)コマンドを使用するときは、パスワードの入力が必要になります。

XCPに関する不具合と回避方法

ここでは、XCPに関する不具合と回避方法をバージョンごとに記載します。

XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法

XCP 2080で発生しうる不具合とこれらの不具合に対する回避方法を、以下の表に示します。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130109-003	○	○	○	PCIボックスが接続されたSPARC M10システム筐体のLSB番号を、setpcl(8)コマンドを使用して変更し、論理ドメイン構成でOracle Solarisを起動すると、showhardconf(8)コマンドを実行しても、PCIボックスの構成情報が表示されません。	setdomainconfig(8)コマンドを使用して、論理ドメイン構成をfactory-defaultに設定し、物理パーティション (PPAR) の電源を投入してください。その後、論理ドメインを設定しなおしてください。
RTIF2-130219-003			○	initbb(8)コマンドでSPARC M10-4S減設時にXSCF BB制御ケーブルを取り外したり、replacefru(8)コマンドでSPARC M10-4SまたはXSCFユニットを交換したりすると、以下のエラーログが登録されます。 Msg: Board control error (MBC link error) Msg: BB control cable detected unexpected Msg: XSCF hang-up is detected	有効な回避方法はありません。エラーログを無視してください。
RTIF2-130219-004			○	クロスバーボックスに搭載されたクロスバーユニットで故障が発生した場合、エラーログに「failed to read/write interrupt mask register」が多数登録されることがあります。	有効な回避策はありません。物理パーティション (PPAR) の電源を切断し、クロスバーボックス内のクロスバーユニットを交換してください。
RTIF2-130219-006	○	○	○	物理パーティション (PPAR) の電源投入中に、flashupdate(8)コマンドやrebootxscf(8)コマンドを使用してXSCFを再起動すると、POSTが診断を完了した状態 (Initialization Complete) で停止することがあります。	reset porコマンドを実行するか、poweroff -fコマンドでPPARの電源を切断したあと再投入してください。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130219-007			○	ビルディングブロック構成のシステムで、クロスバーボックスやSPARC M10-4Sの入力電源を切断したあと再投入すると、エラーログに「Board control error (MBC link error)」が登録されていることがあります。さらに、存在しないクロスバーボックスやSPARC M10-4Sを故障ユニットとして表示することがあります。	このエラーログは入力電源を切断したときに登録されます。このエラーログは無視してください。
RTIF2-130305-001	○	○	○	setpowercapping(8)コマンドを実行し、消費電力制限機能を「有効」、消費電力上限値を「100パーセント指定 (デフォルト)」、消費電力の上限値を超えた場合の猶予時間を「none」に設定し、入力電源を投入または物理パーティション (PPAR) の電源を切断すると、イベントログに「The limit of power have been exceeded」が登録されます。	有効な回避方法はありません。このイベントログは無視してください。
RTIF2-130305-002	○	○	○	CPUまたはメモリの故障を検出し、XSCFが制御ドメインへ故障情報を通知している最中にXSCFの切り替えが発生すると、その故障情報が制御ドメインへ再通知されないことがあります。そのため、showlogs errorコマンドで表示される故障情報が、fmdumpコマンドで出力されるFault Reportに表示されません。	有効な回避方法はありません。showlogs errorコマンドで表示されたFRUに従って、保守してください。
RTIF2-130305-003	○	○	○	入力電源ケーブルを抜去したあとすぐに接続しなおすと、入力電源の構成異常を表す以下のエラーログが登録されることがあります。 [XCP 2041以降の場合] Wrong PSU is installed [XCP 2032以前の場合] PSUs detect 100V and 200V at AC inputs	有効な回避方法はありません。このエラーログは無視してください。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130305-004			○	replacefru(8)コマンドを使用して、SPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスの、XSCFユニットを交換すると、以下のメッセージが出力されて、交換に失敗することがあります。 [Warning:010] An internal error has occurred.	replacefru(8)コマンドをいったん終了してから、実行しなおしてください。 それでも失敗する場合は、システムを停止してから交換してください。
RTIF2-130305-007	○	○	○	tests(8)コマンドまたはdiagxbu(8)コマンドを実行したとき、システムボード (PSB) の構成違反が検出されると、登録されたエラーログのFRUが「PPAR#30」で表示されます。	有効な回避方法はありません。該当するSPARC M10システム筐体のPSBを保守してください。
RTIF2-130305-009	○	○	○	setsnmp addtraphostコマンド、またはsetsnmp adv3traphostコマンドを使用して、トラップホストのIPアドレスを129エントリー以上登録したあとshowsnmp(8)コマンドを実行すると、128エントリーまでしか表示されません。	有効な回避方法はありません。setsnmp(8)コマンドを使用して、トラップホストのIPアドレスを129エントリー以上登録した場合、異常終了しなければ、IPアドレスは正しく登録されています。
RTIF2-130305-020			○	XSCFのパニックやハングが発生したときに、「XSCF hang-up is detected」のエラーログが過剰に通知されることがあります。	有効な回避手段はありません。同じ時期に通知された同じ内容のログは、同一の原因として無視してください。
RTIF2-130305-022			○	「XSCF hang-up is detected」のエラーログが検出され、showboards(8)コマンドで「unknown」のシステムボード (PSB) があるとき、poweron(8)コマンドが以下のメッセージで失敗することがあります。XSCF Web、APCSや電源連動による電源投入指示でも同様です。 Not powering on : An internal error has occurred. Please contact your system administrator.	有効な回避手段はありません。showboards(8)コマンドで「unknown」となっている、PSBのXSCFを交換してください。
RTIF2-130305-023			○	クロスバーユニットのDC-DCコンバーターに故障が発生した場合は、本来「LSI detected errors with power subsystem failure。」のエラーログが登録されるが、誤って「XB-XB interface link-up error.」が登録されます。	有効な回避方法はありません。「XB-XB interface link-up error」のエラーログが登録された場合、電源の故障が発生していないか確認してください。 電源の故障が発生している場合は、「XB-XB interface link-up error」のエラーログは無視してください。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130305-025			○	多数の物理パーティション (PPAR) を設定している状態でpoweroff(8)コマンドを実行すると、1 PPARずつ電源が切断されるため処理時間がかかります。システム構成によっては、1時間程度かかることがあります。	有効な回避手段はありません。
RTIF2-130329-005	○			SPARC M10-1で入力電源の投入時に、XSCFのREADY LEDが点滅したまま起動しないことがあります。	有効な回避手段はありません。入力電源を切断後、再投入してください。
RTIF2-130410-001			○	diagxbu(8)、またはtests(8)コマンドを実行してシステムボード (PSB) の電源切断処理中に、以下のメッセージが出力され、システムボードの診断に失敗することがあります。 [Warning:010] An internal error has occurred.	有効な回避方法はありません。showhardconf(8)コマンドを実行して該当するPSBのPwr欄が「n」になっていることを確認してください。「y」の場合は、数分間隔でshowhardconf(8)コマンドを実行して、「n」になることを確認してください。
RTIF2-130410-002			○	物理パーティション (PPAR) の電源投入処理中にswitchscf(8)コマンドを実行してXSCFの切り替えを実施すると、XSCFの切り替えに失敗することがあります。	PPARの電源投入処理中にswitchscf(8)コマンドを使用して、XSCFの切り替えを実施しないでください。
RTIF2-130410-003			○	以下のすべての条件を満たしたシステムで、物理パーティション (PPAR) を電源を投入すると、他のPPARの電源も投入されることがあります。 ■ setremotepwrmgmt(8)コマンドで電源連動を有効にしている。 ■ 電源連動の管理項目にSubNodeIDを設定しないノードを作成している。 ■ 複数のPPARで構成されている。	■ 電源連動が不要の場合 setremotepwrmgmt -c disableで電源連動を無効にしてから、clearremotepwrmgmt(8)コマンドで電源連動設定を削除してください。 ■ 電源連動が必要な場合 複数のPPARで構成されているシステムでは、電源連動の管理ファイルに、SubNodeIDとして、PPAR-IDを指定して作成したあと、setremotepwrmgmt -c configで電源連動の設定を登録してください。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130516-002			○	物理パーティション (PPAR) の電源を切断している最中に、XSCFの切り替えまたはXSCFのリセットが発生した場合、電源が切断できないことがあります。	有効な回避方法はありません。PPARの電源を切断している最中に、switchscf(8)コマンドによるXSCFの切り替え、またはrebootxscf(8)コマンドによるXSCFのリセットを行わないでください。
RTIF2-130516-004			○	4BB以上の構成でハードウェア故障が発生した場合、クラスタの自動系切り替えに失敗することがあります。 また、1台のクラスタに16以上のゲストノードが組み込まれている場合、制御ドメインのコンソールに下記のワーニングメッセージが出力されることがあります。 SA SA_xscf????.so to test host ??? failed	クラスタの自動系切り替えに失敗した場合は、クラスタソフトのマニュアルの手順に従い、手動で切り替えてください。
RTIF2-130516-005				restoreconfig(8)、 restorecodactivation(8)コマンドでデータをリストア中に showcodactivation(8)コマンドを実行すると、実行結果が表示できないことがあります。このとき、showcodactivation(8)コマンドが「codd internal error」でエラーとなります。	restoreconfig(8)や restorecodactivation(8)コマンドの実行が完了してから、 showcodactivation(8)コマンドを実行すると、実行結果が表示できるようになります。
RTIF2-130516-006			○	複数の物理パーティション (PPAR) の電源を同時に投入している最中に、XSCFの切り替えが発生した場合、電源の投入に通常より時間がかかることがあります。	有効な回避方法はありません。PPARの電源を投入している最中に、switchscf(8)コマンドによるXSCFの切り替えを行わないでください。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130702-001		○	○	SPARC M10-4/M10-4Sにおいて、CPUメモリユニット（下段）（CMUL）のみで運用していた構成にCPUメモリユニット（上段）（CMUU）を増設し、かつ物理パーティション（PPAR）のIOreconfigure設定がfalseとなっている場合、PPARの電源投入時および制御ドメインのリブート時に、「I/O devices error detected」が検出されます。	増設後の電源投入時に検出されるエラーを回避する方法はありません。 以下の設定を行うと、PPARの電源投入や制御ドメインのリブートのたびに、エラーが検出されることを回避できます。 1. Oracle Solaris起動後、ldm rm-ioコマンドを使用して、増設したCMUUのPCIeルートコンプレックスを制御ドメインの構成から削除します。 2. ldm add-spconfigを使用して、構築した論理ドメイン構成をXSCFへ保存します。
RTIF2-130710-001			○	switchscf(8)コマンドでXSCFの切り替えを実施すると、ごくまれにスタンバイ状態のXSCFが起動しないことがあります。	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] すべてのSPARC M10-4Sの入力電源を切断/投入（AC OFF/ON）するか、replacefru(8)コマンドを実行して、起動しないSPARC M10-4Sを疑似的に交換（部品を交換せずに交換作業を実施）してください。
RTIF2-130711-003			○	クロスパーボックスのXSCFユニットの活性交換が完了する前に、replacefru(8)コマンドが正常終了します。	replacefru(8)コマンドを使用してXSCFユニットを交換するときには、以下のメッセージが出力されたあと10分待機してから、次の操作を実施してください。 After replacement has been completed, please select[f:finish] :
RTIF2-130801-001			○	switchscf(8)コマンドを実行してもXSCFが切り替わらないことがあります。このとき、マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFが通信できない状態になっており、XSCFの冗長性が保持されない状態となっています。	有効な回避手段はありません。switchscf(8)コマンドを実行してもXSCFが切り替わらない場合には、スタンバイ状態となっている筐体のXSCFユニットをreplacefru(8)コマンドで活性交換してください。また、XSCFユニットを切り離したときに、XSCF BB制御ケーブルを抜き差ししてください。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130801-002	○	○		DIMMが故障すると構成違反が誤検出され、以下のイベントログが登録されます。 SCF:DIMM configuration error on PSB#xx-0	有効な回避手段はありません。構成違反のイベントログは無視してください。 DIMM故障時の保守手順に従い、故障したDIMMが搭載されたSPARC M10システム筐体の入力電源を切断し故障したDIMMを交換したあと、電源を投入しなおすことで構成違反および故障が解消されます。
RTIF2-130802-003			○	replacefru(8)コマンドでクロスバーボックスのXSCFユニットを交換したとき、コマンドは正常に終了しますが、以下のエラーログが登録されることがあります。このエラーログで示される被疑箇所は正しくありません SCF:Board control error (link failed)	再度、replacefru(8)コマンドで同じクロスバーボックスのXSCFユニットを交換してください。交換作業時に入力電源を切断 (AC OFF) した場合は、すべてのXSCF BB制御ケーブルを抜き差ししなおしてください。
RTIF2-131001-001			○	initbb(8)コマンドでSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスを切り離れたあと、XSCF BB制御ケーブルの接続状態はそのままにして、すべての筐体の入力電源を切断して再投入した場合、initbb(8)コマンドで切り離れた筐体がマスタ筐体となり、XSCFの設定が工場出荷時に初期化されてしまいます。	SPARC M10-4Sおよびクロスバーボックスは、必ず以下の手順で切り離してください。 1. initbb(8)コマンドを実行し、対象の筐体を停止させます。 2. 停止させた筐体の入力電源を切断したあと、XSCF BB制御ケーブルを取り外します。
RTIF2-131001-002			○	物理パーティション (PPAR) の稼働中、またはPPARの電源を切断したときに、XSCFのマスタ/スタンバイの切り替えが発生することがあります。マスタ/スタンバイの切り替えが発生した場合、マスタXSCFのコンソールには、以下のメッセージが表示されます。 Kernel panic - not syncing: MBC Dual ifcut interrupt.	有効な回避手段はありません。この不具合によりマスタ/スタンバイの切り替えが発生しますが、システムに影響はありませんので、システムを継続して運用できます。

表 3-1 XCP 2080で発生しうる不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-131023-003	○	○	○	XSCF拡張MIB定義ファイルに、scfDomainInfoGroupのOIDが重複して定義されているため、サーバの管理ソフトウェア（例：日立社製ソフトウェア、統合システム運用管理 JP1）へXSCF拡張MIB定義ファイルをインストールしようとする時、失敗することがあります。	XSCF拡張MIB定義ファイルの重複したOIDのテキスト行を削除し、再度、XSCF拡張MIB定義ファイルのインストールを試みてください。 削除の対象となるテキスト行は、「::= { scfMIBObjectGroups 14 }」のあるscfDomainInfoGroupが定義された行です。 [例] XSCF拡張MIB定義ファイル (XSCF-SP-MIB_2050.mib)の場合以下の3558～3566行を削除します。 ----- 3558: scfDomainInfoGroup OBJECT-GROUP 3559: OBJECTS { 3560: scfDomainNumber, scfPPARId, scfDomainName, 3561: scfDomainStatus 3562: } 3563: STATUS current 3564: DESCRIPTION 3565: "A collection of objects providing PPAR information." 3566: ::= { scfMIBObjectGroups 14 } -----
RTIF2-131107-001			○	XSCF BB制御ケーブルの故障や抜け、またはXSCFの故障が発生していると、複数のSPARC M10-4Sで構成される物理パーティション (PPAR) の、電源の切断やリセットに数時間かかることがあります。	有効な回避方法はありません。

XCP 2080で解決された不具合

XCP 2080で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-2 XCP 2080で解決された不具合

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121219-011			○	poweroff(8)コマンドによる物理パーティション (PPAR) の電源の切断処理中に、そのPPARに属するシステムボードに対してdeleteboard -c unassignを実行すると、そのPPARの電源が切断できなくなることがあります。	poweroff(8)コマンドを実行したあと、showppl(8)コマンドで当該PPARのstatus欄がPowered Offとなっていることを確認してから、deleteboard(8)コマンドを実行してください。
RTIF2-130305-018			○	replacefru(8)コマンドで「BB」選択時の「Diagnostic tests」、またはtestsb(8)コマンド実行時に、internal errorが発生することがあります。このとき、エラーログを確認すると、internal errorの発生時刻に「PPAR#30」で「no PSB available in PPAR」が登録されています。	該当するSPARC M10-4Sで故障が発生し、システムボード (PSB) が使用できない状態になります。エラーログを確認のうえ、SPARC M10-4Sを交換してください。
RTIF2-130305-019	○	○	○	testsb(8)コマンドで異常が発生しても診断を継続してしまい、2時間待たされたあとタイムアウトします。	testsb(8)コマンド実行中に別セッションでshowboards(8)コマンドを実行して、診断対象のPSBの状態を確認してください。「Test」が「Testing」以外で、かつ「Pwr」が「n」になっている場合は、正しく動作していないため、testsb(8)コマンドを[Ctrl]+[C]で中断ください。
RTIF2-130307-001			○	diagxbu(8)コマンドで指定したSPARC M10-4Sのいずれかが未実装の場合、未実装のSPARC M10-4Sを示すPSB番号がメッセージ「PSB#xx-0 is not installed.」として出力されるはずが、誤って、実装されているSPARC M10-4SのPSB番号が出力されることがあります。	有効な回避方法はありません。showhardconf(8)コマンドを実行して、該当のPSB番号が割り当てられているSPARC M10-4Sの実装状態を確認してください。未実装のSPARC M10-4Sはshowhardconf(8)コマンドでは表示されません。該当するSPARC M10-4Sが表示されている場合は、メッセージ「PSB#xx-0 is not installed.」のPSB番号は、コマンド実行時に指定した未実装のSPARC M10-4SのPSB番号と読み替えてください。

表 3-2 XCP 2080で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-131023-001	○	○	○	<p>論理ドメインの起動中や停止中に、<code>rebootxscf(8)</code>コマンドや<code>switchxscf(8)</code>コマンドなどを実行してXSCFをリセットさせると、以下の問題が発生することがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>showdomainstatus(8)</code>コマンドを実行すると、論理ドメインの状態が正しく表示されない。 ■ <code>showlogs event</code>コマンドを実行すると、論理ドメインの状態通知のためのログが表示されない。 ■ 論理ドメインの、状態通知のためのSNMP Trapが送信されない。 	<p>有効な回避方法はありません。</p> <p>[復旧方法] 論理ドメインの状態を正しく表示するには、論理ドメインを再起動するなどして、論理ドメインの状態を更新してください。</p>
RTIF2-131023-004	○	○	○	<p>論理ドメインでI/O異常が検出されても、XSCFにエラーが通知されないことがあります。このため、<code>fmdump(1M)</code>コマンドを実行して表示されるFault ReportにあるI/Oの故障情報が、<code>showlogs error</code>コマンドを実行しても表示されません。</p> <p>また、XSCFでCPUまたはメモリの故障が検出されても、論理ドメインへこのエラーが通知されないことがあります。このため、<code>showlogs error</code>コマンドを実行して表示されるCPUまたはメモリの故障情報が、<code>fmdump(1M)</code>コマンドを実行してもFault Report上に表示されません。</p>	<p>有効な回避方法はありません。</p> <p>論理ドメインでI/O異常が検出された場合は、<code>fmdump(1M)</code>コマンドを実行して表示されるFault Reportから故障箇所を特定し、故障部品を保守してください。XSCFでCPUまたはメモリの故障が検出された場合は、<code>showlogs error</code>コマンドで表示されたFRUに従って、保守してください。</p>

XCP 2070で解決された不具合

XCP 2070で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130228-001	○	○	○	Oracle Solaris起動中にpoweroff -fコマンドで物理パーティション (PPAR) の電源を強制的に切断したあと、PPARの電源を再投入すると、OSコンソールに「Unable to connect to Domain Service providers」が出力され、Oracle Solarisが起動できないことがあります。	poweroff(8)コマンドでPPARの電源を切断したあと、poweron(8)コマンドでPPARの電源を再投入してください。それでも、Oracle Solarisが起動しない場合は、PPARの電源を切断したあとにXSCFをリセットしてから、PPARの電源を投入しなおしてください。
RTIF2-130516-001	○	○	○	ETERNUSと電源連動を設定しているシステム構成で、SRARC M10システムのオペレーションパネルにある電源スイッチから電源を投入しても、ETERNUSの電源が投入されません。	下記のいずれかの方法で電源を投入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCFコマンドのpoweron(8)コマンド ■ XSCF Webページのメニュー ■ スケジュール設定による電源の自動投入
RTIF2-130709-001			○	物理パーティション (PPAR) の電源が投入されている状態で、マスタXSCFの切り替えが発生すると、スタンバイ状態のXSCFがマスタXSCFに切り替わるまでに時間がかかることがあります。その結果、以下のエラーが発生することがあります。 Master switch synchronization timeout	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] <ul style="list-style-type: none"> ■ PPARの電源が投入されている状態でflashupdate(8)コマンド実行時にエラーが発生した場合： PPARの電源を切断して、flashupdate(8)コマンドを再度実行してください。 ■ PPARの電源が投入されている状態でswitchscf(8)コマンド実行時にエラーが発生した場合、またはPPARの電源が投入されている状態でXSCFの故障 (プロセスダウンなど) によりエラーが発生した場合： 「XSCF hang-up is detected」のエラーログが登録されたSPARC M10-4Sの筐体を、以下のどちらかの方法で復旧してください。 <ul style="list-style-type: none"> ■ CPUメモリユニット (下段) (CMUL) またはXSCFユニット (XSCFU) をreplacefru(8)コマンドで交換する。 ■ CPUメモリユニット (下段) (CMUL) またはXSCFユニット (XSCFU) の入力電源を切断したあとと再投入する。

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130711-001			○	<p>replacefru(8)またはaddfru(8)コマンドを実行してSPARC M10-4Sを保守する場合、「FMEM serious error」のエラーログが登録され、replacefru(8)またはaddfru(8)コマンドが失敗することがあります。</p> <p>また、flashupdate(8)コマンド実行中に物理パーティション (PPAR) の電源を投入した場合も、同様に、「FMEM serious error」のエラーログが登録され、flashupdate(8)コマンドが失敗することがあります。</p>	<p>詳細は「SPARC M10-4Sの「FMEM serious error」への対応 (RTIF2-130711-001)」を参照してください。</p>
RTIF2-130716-001	○	○	○	<p>ioxadm(8)コマンドを実行して、PCIボックスファームウェアをアップデートすると、「LINKCARD I2C error」のエラーが発生することがあります。</p>	<p>有効な回避方法はありません。ただし、以下の両方が確認できた場合は、PCIボックスファームウェアのアップデートは正常に終了しています。この場合、「LINKCARD I2C error」のエラーメッセージを無視して、運用を継続してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ioxadm(8)コマンドによるPCIボックスファームウェアのアップデートが正常終了している。 ■ ioxadm -v listコマンドを実行すると、PCIボックスファームウェアの版数がアップデートしたときに指定した版数になっている。
RTIF2-130802-001	○	○	○	<p>getflashimage(8)コマンドでUSBメモリを指定した場合に、下記のメッセージが出力され、コマンドの実行が失敗することがあります。</p> <p>Error: Unable to mount USB device.</p>	<p>USBメモリを抜き差ししなおしてから、再度getflashimage(8)コマンドを実行してください。</p>
RTIF2-130802-002	○	○	○	<p>Oracle Solaris稼働状態のときに、setsnmp(8)コマンドを使用してSNMPの設定を変更すると、以下の現象が発生することがあります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. prtpicl -v、prtdiag -vコマンドの結果で、XCP版数など、一部のデータが出力されない。 2. Oracle Solarisの/var/adm/messagesに、以下のワーニングメッセージが出力される。 PICL snmpplugin: cannot fetch 	<p>有効な回避方法はありません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 1.が発生した場合 以下の手順で復旧します。 1) prtdiagコマンドを [Ctrl]+[C]で終了します。 2) 約30分放置して、XSCFでSNMPのタイムアウトを発生させます。 3) 論理ドメイン上でsvcadm コマンドを実行し、picl サービスを再起動させます。 ■ 2.が発生した場合

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
				object value	一時的なワーニングメッセージのため、システムの運用を継続できます。
RTIF2-130806-001	○	○	○	<p>各モデルの以下のFRUを交換した場合、XSCFの時計は2001年1月1日に初期化されます (仕様)。このため、XSCFをNTPクライアントとして設定している場合、これらのFRUを交換したあと、物理パーティションの電源を投入すると、制御ドメインの時刻が、期待値とは大幅にずれた状態になることがあります。</p> <p>[SPARC M10-1]</p> <ul style="list-style-type: none"> マザーボードユニット (MBU) PSUバックプレーンユニット (PSUBP) <p>[SPARC M10-4]</p> <ul style="list-style-type: none"> CPUメモリユニット (下段) (CMUL) <p>[SPARC M10-4S]</p> <ul style="list-style-type: none"> CPUメモリユニット (下段) (CMUL) クロスバーバックプレーンユニット (XBBPU) XSCFユニット (XSCFU) <p>この不具合は、showdateoffset (8)コマンドを実行後、XSCFと制御ドメインとの時刻差分を示す「Domain Date Offset」の値が、膨大な値(10年以上)になっていることで確認できます。</p> <p>[例]</p> <pre>XSCF> showdateoffset -a PPAR-ID Domain Date Offset 00 7931983 sec 01 7931983 sec 02 7931983 sec 03 7931983 sec : 15 7931983 sec</pre>	<p>有効な回避方法はありません。[説明]にあるFRUを交換したあとは、以下を実施してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 物理パーティションの電源を投入する前に、showdateoffset (8)コマンドを実行して、「Domain Date Offset」の値を確認します。 <ul style="list-style-type: none"> 「Domain Date Offset」の値が膨大な値 (10年以上) ではない場合、システムの運用を継続できます。 「Domain Date Offset」の値が膨大な値 (10年以上) の場合、手順2以降を実行します。 resetdateoffset(8)コマンドを実行して、XSCFと制御ドメインの時刻差分をいったんクリアします。 XSCF> resetdateoffset -a Clear the offset of all PPARs? [y n]:y XSCF> poweron -aコマンドを実行して、すべての物理パーティションの電源を投入します。 showdateoffset(8)コマンドを実行し、「Domain Date Offset」の値がすべて0になり、XSCFと制御ドメインの時刻が合わせられたことを確認します。 XSCFと制御ドメインを異なる時刻で運用していた場合、date(1M)コマンドを実行して、制御ドメインの時刻を再設定します
RTIF2-130826-001			○	<p>スタンバイXSCFが、保守中または入力電源切断状態のどちらかの場合に、マスタXSCFからXSCF Webにログインすると、「Cannot communicate with BB#xxx: ...」で始まる、改行のないコミュニケーションエラーを示すダイアログが出力されます。</p>	<p>有効な回避方法はありません。ダイアログ内のメッセージは、表示の不具合が原因のためそのまま運用できます。このコミュニケーションエラーに関するダイアログは無視してください。</p>

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130902-001			○	複数のSPARC M10-4Sで構成されているシステムで、論理ドメインの稼働中にファームウェアをアップデートすると、マスタXSCFがスタンバイ状態のXSCFに切り替わらず、ファームウェアのアップデートが失敗することがあります。	有効な回避方法ははありません。以下の手順でシステムを復旧させてください。 1. いずれかのスタンバイ状態のXSCFにログインし、以下のコマンドを実行します。 XSCF> rebootxscf -s 2. 10秒後、もう片方のスタンバイ状態のXSCFにログインし、以下のコマンドを実行します。 XSCF> rebootxscf -a 3. 20分待ってからマスタXSCFにログインし、flahsupdate(8)コマンドを再度実行します。
RTIF2-130903-002			○	複数のSPARC M10-4Sで構成されているシステムで、物理パーティション (PPAR) の電源を投入してからPower-On Self test (POST) が開始するまで、通常より時間がかかることがあります。例えば、2BB構成では通常10分程度でPOSTが開始するところ20分以上かかることがあります。	有効な回避手段はありません。この不具合が発生した場合は、rebootxscf -aコマンドを実行してすべてのXSCFをリセットし、システムを復旧してください。
RTIF2-130903-006			○	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムで、複数の物理パーティション (PPAR) が存在する場合、一部のSPARC M10-4Sの入力電源を切断したあと再投入すると、「SRAM Serious Error」が発生し、CPUメモリユニット (下段) (CMUL) の交換が必要となることがあります。また、showpparstatus(8)コマンドやshowdomainstatus(8)コマンドで状態を表示したときに、PPARの状態が正しく表示されないことがあります。	有効な回避手段はありません。PPARが稼働している状態でSPARC M10-4Sの入力電源を切断しないでください。poweroff(8)コマンド等でPPARを停止させてから、入力電源を切断してください。
RTIF2-130903-007	○	○	○	PowerOn状態の物理パーティション (PPAR) に対してsetcod(8)コマンドを繰り返し実行すると、プロセス内部で使用可能なリソースを使い果たし、coddがプロセスダウンすることがあります。	PPARがPowerOff状態のときにsetcod(8)することで回避できます。 [復旧方法] coddを再起動してください。

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130903-008	○	○	○	<p>OpenBoot PROMのselectコマンドで任意のデバイスを指定したあと、<code>unselect-dev</code>コマンドを実行しなかった場合、続けて<code>boot</code>コマンドを使用してネットワークデバイスからOracle Solarisを起動すると、以下の不具合が発生します。</p> <p>論理ドメインのコンソールに「<code>seek failed</code>」と「<code>Can't mount root</code>」のメッセージが表示され、Oracle Solarisの起動に失敗します。その後、「<code>I/O device error detected</code>」のメッセージがエラーログに登録され、論理ドメインがリセットされます。論理ドメインのリセット後、<code>select</code>コマンドで指定したデバイスが縮退されます。</p> <p>リセット後の論理ドメインは、OpenBoot PROM環境変数である「<code>auto-boot?</code>」の設定によって以下の状態となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>auto-boot?</code>が<code>true</code>の場合 <code>boot-device</code>に設定されているデバイスからOracle Solarisが起動されます。ただし、上記<code>select</code>コマンドで指定したデバイスが<code>boot-device</code>に設定されているブートデバイスと同じ場合は、このデバイスが縮退されているため、Oracle Solarisは起動されず、<code>ok</code>プロンプトの状態となります。 ■ <code>auto-boot?</code>が<code>false</code>の場合 通常の運用と同様、<code>ok</code>プロンプトの状態となります。 	<p>デバイスを指定して<code>select</code>コマンドを実行したあとは、必ず<code>unselect-dev</code>コマンドを実行してから<code>boot</code>コマンドを実行してください。</p> <p>[例] <pre>{0} ok select /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@1/network@0 {0} ok unselect-dev {0} ok boot net</pre></p> <p>[復旧方法]</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 不具合発生後、論理ドメインが<code>ok</code>プロンプトの状態である場合 以下のコマンドを実行して、論理ドメインをリセットしてください。 <pre>{0} ok reset-all</pre> ■ 不具合発生後、論理ドメインのOracle Solarisが起動している場合 <code>shutdown</code>コマンドにより<code>ok</code>プロンプトの状態にしてから、環境変数<code>auto-boot?</code>を<code>false</code>に設定し、<code>reset-all</code>コマンドによりOpenBoot PROMを再起動してください。 <p>[例] <pre># shutdown -y -g0 -i0 {0} ok setenv auto-boot? false {0} ok reset-all</pre></p> <p>復旧したあとは、この不具合によって縮退されたデバイスは正常に認識されるようになります。不具合発生時にエラーログに登録されたメッセージは無視してください。</p>

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130930-001	○	○	○	<p>XSCFにタイムゾーンを設定し、かつ、サマータイムを導入している環境において、物理パーティション (PPAR) を再起動するか、PPARの電源を切断了あと再投入すると、論理ドメインの起動時刻が3600秒以上進む、または、遅れることがあります。</p> <p>これは、showdateoffset(8)コマンドを実行することで確認できます。</p> <p>以下の実行例のように、PPARとXSCFとの時刻の差分が +/-3600秒以上の値になっている場合は、この不具合に相当します。</p> <pre>XSCF> showdateoffset -a PPAR-ID Domain Date Offset 00 -7205 sec 01 -7205 sec 02 -7205 sec 03 -7205 sec 04 -7205 sec 05 -7205 sec 06 -7205 sec 07 -7205 sec 08 -7205 sec 09 -7205 sec 10 -7205 sec 11 -7205 sec 12 -7205 sec 13 -7205 sec 14 -7205 sec 15 -7205 sec</pre>	<p>有効な回避方法はありません。システム内のすべての論理ドメインで、NTPサーバーと時刻が同期できるように設定し、論理ドメインの起動時刻がずれた場合は、NTPで時刻を補正してください。</p>
RTIF2-131004-001	○			<p>物理パーティション (PPAR) の電源が投入されている状態で、ファームウェアアップデートを行うと、「CPU-MBC interface fatal error」というマザーボードユニット (MBU) のエラーが誤検出され、エラーログに登録されることがあります。この誤検出により論理ドメインが停止する場合があります。</p>	<p>物理パーティション (PPAR) の電源が切断している状態で、ファームウェアアップデートを実施してください。</p>

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-131004-002			○	3BB以上で構成されたシステムで、マスタXSCFとスタンバイXSCFの、筐体の入力電源を切断したあと再投入すると、マスタXSCFが存在しない状態になります。また、XSCF DUAL制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態でマスタXSCFを停止させると、XSCFのマスタ/スタンバイの切り替えが抑止され、スタンバイXSCFがマスタXSCFに切り替わりません。	有効な回避手方法ははありません。XCP 2070以降のファームウェアにアップデートしてください。
RTIF2-131004-003			○	XSCF DUAL制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態でXSCFのマスタ/スタンバイの切り替えが発生すると、マスタ/スタンバイ間の通信が保障されていないにも関わらず切り替え処理が行われることがあります。 XSCF DUAL制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態で、XSCFを設定したあとXSCFのマスタ/スタンバイの切り替え処理が行われると、XSCFに設定した情報が消えてしまいます。	有効な回避手段はありません。XSCF DUAL制御ケーブルが正常に接続されている状態で、XSCFのマスタ/スタンバイの切り替えを行ってください。XSCF DUAL制御ケーブルが正常に接続されている状態は、以下の手順で確認できます。 1. showsscp -a コマンドを実行します。 2. 1.の出力結果で、SSCPリンクネットワークのID (network_id) が2または4のAddressに「Cannot communicate.」が表示されていないことを確認します。 [例]クロスバーボックスなしの場合は、SSCPリンクネットワークのID (network_id) 2のAddressを確認します。 XSCF> showsscp -a -N 2 : : Location Address ----- bb#00-if#2 169.254.1.17 bb#01-if#2 169.254.1.18 同様に、クロスバーボックスありの場合は、SSCPリンクネットワークのID (network_id) 4のAddressを確認します。

表 3-3 XCP 2070で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-131108-001	○	○	○	<p>「SCF Diagnosis initialize RTC」のエラーが発生した場合、または、SPARC M10-1でマザーボードユニット (MBU) を、SPARC M10-4/M10-4SでCPUメモリユニット (下段) (CMUL) を交換した場合、以下の現象が発生することがあります。</p> <p>[現象1] XSCFの時刻が2001年1月1日に戻ることがあります。</p> <p>[現象2] XSCFとすべての物理パーティション (PPAR) との時刻の差分が、4億秒以上の膨大な値になることがあります。この現象は、showdateoffset(8)コマンドを実行すると、すべてのPPARとXSCFの時刻の差分が「400000000 sec」以上の値で表示されることで確認できます。 XSCF> showdateoffset -a PPAR-ID Domain Date Offset 00 400000100 sec 01 400000100 sec : : 15 400000100 sec</p> <p>[現象3] PPARをリセットしたり、PPARの電源を切断後再投入すると、Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日に戻ることがあります。</p>	<p>有効な回避方法はありません。XCP 2070以降のファームウェアにアップデートしてください。</p> <p>[復旧方法] 「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの復旧方法 (RTIF2-131108-001)」を参照してください。</p>

SPARC M10-4Sの「FMEM serious error」への対応 (RTIF2-130711-001)

- SPARC M10-4Sを交換する場合
 replacefru(8)コマンド実行して出力される保守メニューに従ってSPARC M10-4S交換する場合、手順3を実行して、対象のSPARC M10-4S (BB#x) の入力電源を投入したあと50分待機してから、手順4で"f"を入力して実行してください。

```
Please execute the following steps:
1) Remove (Delete) the BB#x from a system.
2) Turn off the breaker of the BB#x.
3) After the exchanged device is connected with the system, turn on the breaker of the BB#x.
```

4) Please select[f:finish] :

- SPARC M10-4Sを追加する場合
addfru(8)コマンドを実行して出力される保守メニューに従ってSPARC M10-4Sを追加する場合、手順1を実行して、対象のSPARC M10-4S (BB#x) の入力電源を投入したあと50分待機してから、手順2で"f"を入力して実行してください。

Please execute the following steps:

- 1) After the added device is connected with the system, please turn on the breaker of the BB#x.
- 2) Please select[f:finish] :

- flashupdate(8)コマンドを実行する場合
flashupdate(8)コマンドを実行中に物理パーティション (PPAR) の電源を投入しないでください。flashupdate(8)コマンドを実行中にPPARの電源を投入してしまった場合、コマンドが完了したあと、PPARの電源を投入しなおしてください。flashupdate(8)コマンドの完了は、showlogs eventコマンドを実行し、以下のメッセージを確認してください。

XCP update has been completed (XCP version=xxxx:last version=yyyy)

「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの復旧方法 (RTIF2-131108-001)

[復旧方法]

- 現象1が発生した場合
 - a. Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻を再設定するため、setdate(8)コマンドを実行してください。このとき、XSCFがリセットされます。その後、PPARの電源を切断後再投入してください。
 - b. Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日ではないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上でresetdateoffset(8)やsetdate(8)コマンドは実行しないでください。
 - c. PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のa.またはb.を実施してください。
- 現象2が発生した場合
 - a. Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻とすべてのPPARのハイパーバイザ間で生じている不正な時刻の差分を初期化する必要があります。すべてのPPARを停止し、resetdateoffset -aコマンドを実行して、時刻の差分をクリアしてください。
 - b. Oracle Solarisの時刻が2001年1月1日でないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上でresetdateoffset(8)やsetdate(8)コマンドは実行しないでください。

- c. PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のa.またはb.を実施してください。
- 現象3が発生した場合
現象1または現象2も発生している場合、まず、それらの[復旧方法]を実施してください。
Oracle Solarisの時刻を設定しなおしてください。

XCP 2052で解決された不具合

XCP 2052で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-4 XCP 2052で解決された不具合

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130827-001	○	○	○	XSCF-LANのハードウェア設定の不具合により、XSCFのパケット受信が遅延し応答が遅れることで、通信相手側でタイムアウトや接続失敗を検出することがあります。	有効な回避方法はありません。
RTIF2-130903-004			○	XSCF BB制御ケーブルまたはXSCF DUAL制御ケーブルが正しく接続されていない状態で、XSCFのマスタ/スタンバイ切り替えが発生した場合、マスタXSCFの設定を引き継げず、正しい設定で動作できないことがあります。	有効な回避方法はあります。XSCF BB制御ケーブルとXSCF DUAL制御ケーブルの両方が正しく接続されているか確認してください。この不具合が発生した場合は、各ケーブルの接続を確認したあと、マスタXSCFで行ったすべての設定が反映されているか確認してください。設定が反映されていない場合は、XSCFを設定しなおしてください。
RTIF2-131004-004			○	XSCF BB制御ケーブルが故障した状態、または接続されていない状態でスタンバイXSCFを再起動すると、マスタXSCFとして起動されてしまい、システムにマスタXSCFが2つ存在してしまいます。マスタXSCFが2つある状態では、システム動作は保障できません。この状態は、背面パネルにあるMASTER LEDの点灯している筐体が2つあることで確認できます。	有効な回避手段はありません。マスタ/スタンバイ間のXSCF BB制御ケーブルが故障している状態、または接続されていない状態で、XSCFをリセットしないでください。 [復旧方法] マスタXSCFが2つある状態になった場合は、すべての筐体の入力電源を切断したあと再投入してください。

XCP 2051で解決された不具合

XCP 2051で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-5 XCP 2051で解決された不具合

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130717-001	○	○	○	PSUバックプレーン (PSUBP) またはクロスバーボックスの XSCFインターフェースユニット (XSCFIFU) 上にある USB-SSDで異常が発生した場合、エラーログ「System backup memory access error」が登録され、poweron(8)コマンドが実行できない、またはsnapshot(8)コマンドでデータが採取できないなどの不具合が発生することがあります。	有効な回避方法はありません。この不具合が発生した場合は、入力電源を切断/投入 (AC OFF/ON) してください。

XCP 2050で解決された不具合

XCP 2050で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-6 XCP 2050で解決された不具合

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130219-002			○	スレーブXSCFのSPARC M10-4Sを保守する場合、スタンバイ状態のXSCFとスレーブXSCF間のXSCF接続ケーブルを誤接続すると、異常を検知せずに、正常に終了したと見なされてしまいます。	switchscf(8)コマンドを使用して、マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFを切り替えたあと、対象のスレーブXSCFに対してtestsb(8)コマンドを実行してください。XSCF接続ケーブルの誤接続を検知してエラーログが発行されます。
RTIF2-130305-016			○	flashupdate -c syncコマンドでSPARC M10-4SまたはクロスバーボックスのXCPファームウェアの版数合わせを行うと、タイムアウトすることがあります。	-fオプションを指定してflashupdate(8)コマンドを実行し、すべてのSPARC M10-4Sまたはクロスバーボックスに対して、XCPファームウェアをアップデートしなおしてください。

表 3-6 XCP 2050で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130319-002	○	○	○	SPARC M10-4Sで、物理パーティション (PPAR) の電源切断処理が完了する前に、SPARC M10-4Sやクロスバーボックスの入力電源を切断後再投入し、再度PPARの電源を投入すると、以降にswitchscf(8)コマンド、ファームウェアアップデート、または故障によるマスタXSCFの切り替えが発生した場合に、稼働中のPPARの電源が切断されることがあります。	SPARC M10-4Sやクロスバーボックスの入力電源を切断する前にPPARの電源を切断する場合は、対象となるPPARおよびSPARC M10-4Sの電源の切断が完了していることを、showboards(8)コマンドとshowlogs powerコマンドを使用して確認してください。そのあと、SPARC M10-4Sやクロスバーボックスの入力電源を切断してください。
RTIF2-130319-003	○	○	○	poweroff(8)コマンドで物理パーティション (PPAR) の電源切断処理中に、制御ドメインでshutdown -i5コマンドを実行したり、okプロンプトでpower-offコマンドを実行したりして、PPARの電源の切断を競合させた場合、イベントログに「SCF:PPAR issued power-off request (PPARID X)」が多数登録されることがあります。	PPARの電源は正常に切断されているため、登録されたイベントログは無視してください。
RTIF2-130329-004			○	ビルディングブロック構成のシステムで、物理パーティション (PPAR) の電源投入中に以下の操作が行われると、制御ドメインコンソールに接続できないことがあります。 1. PPARを構成するSPARC M10-4SのいずれかのXSCFがリセットされる。 2. マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFが切り替えが発生する。 3. 1.でリセットされたSPARC M10-4SのXSCFが再度リセットされる。	有効な回避手段はありません。switchscf(8)コマンドを使用し、マスタXSCFをリセットしてください。
RTIF2-130329-006			○	マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFが同時に再起動しているときに、パニックやwatchdogタイムアウトなどにより、稼働中の物理パーティション (PPAR) に属しているSPARC M10-4SのXSCFがリセットされると、制御ドメインコンソールに接続ができないことがあります。	有効な回避方法はありません。poweroff -fコマンドを使用してPPARの電源を切断後、再投入してください。

表 3-6 XCP 2050で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130516-003	○	○	○	XSCFの負荷が高い場合、電源ユニット (PSU) を被疑箇所とする以下のワーニングメッセージが出力されることがあります。 Insufficient FAN rotation speed PSU voltage out of range error PSU output current too high PSU over temperature warning	回避方法はありません。 ワーニングメッセージのためそのまま運用できます。メッセージは無視してください。
RTIF2-130528-001	○	○	○	PCIホットプラグ (PHP) 機能を使用して、Quad Gigabit Ethernetカード (SE1X7GQ2F) を、PCIボックス内のPCI Expressスロットに増設することはできません。	これは、XCP 2050とSRU11.1.6.4.0で修正されます。 XCPおよびSRUが適用されていない場合は、増設対象の論理ドメインを停止してから、PCIカードを増設する必要があります。 [留意事項] 論理ドメインの構成情報を保存し、factory-default以外で運用している場合にこの不具合を解決するには、XCPファームウェアのアップデート後に、論理ドメインの構成を再構築する必要があります。詳細は「 論理ドメインの構成を再構築する (RTIF2-130528-001) 」を参照してください。
RTIF2-130903-005	○	○	○	XSCFのメール通報機能において、setsmtp(8)コマンドで設定できる返信先メールアドレスのローカル部およびドメイン部に、以下の文字を含めることはできません。 "! " # " \$ " % " & " "' " " * " + " / " = " ? " ^ " _ " " ` " { " " } " ~ "	[説明]で示された文字を含まない返信先メールアドレスを使用してください。
RTIF2-131023-005	○	○	○	XSCF Webのメニューで [Physical]バーを選択すると、PCI (リンクカードを除く) が異状状態(⚠)に見えます。	有効な回避方法はありません。 PCI (リンクカードを除く) が異状状態(⚠)で表示されても無視してください。

表 3-6 XCP 2050で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-131107-002	○	○	○	<p>システムの入力電源を投入したり、XSCFのリセットやXCPファームウェアをアップデートしたりすると、「SCF Diagnosis initialize RTC」のエラーが誤って検出され、以下の現象が発生することがあります。</p> <p>[現象1] XSCFの時刻が1970年1月1日に戻ることがあります。</p> <p>[現象2] XSCFとすべての物理パーティション (PPAR) との時刻の差分が、13億秒以上の膨大な値になることがあります。この現象は、showdateoffset(8)コマンドを実行すると、すべてのPPARとXSCFとの時刻の差分が「1300000000 sec」以上の値で表示されることで確認できます。 XSCF> showdateoffset -a PPAR-ID Domain Date Offset 00 1300000100 sec 01 1300000100 sec : : 15 1300000100 sec</p> <p>[現象3] PPARをリセットしたり、PPARの電源を切断後再投入したりすると、Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日に戻ることがあります。</p>	<p>有効な回避方法はありません。XCP 2050以降のファームウェアにアップデートしてください。</p> <p>[復旧方法] 「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの誤検出に対する復旧方法 (RTIF2-131107-002)」を参照してください。</p>

論理ドメインの構成を再構築する (RTIF2-130528-001)

論理ドメインの構成情報を保存し、factory-default以外で運用している場合にこの不具合を解決するには、XCPファームウェアのアップデート後に、以下の手順で、論理ドメインの構成を再構築する必要があります。

1. **XSCFに保存された現在の論理ドメインの構成情報を確認します。**
ここでは、config1という論理ドメイン構成情報名が保存されている例で説明します。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
20xx-yy-zz hh:mm:ss
PPAR-ID      :0
Booting config
```

```
(Current) :config1
(Next)    :config1
-----
Index     :1
config_name :factory-default
domains   :1
date_created:-
-----
Index     :2
config_name :config1
domains   :2
date_created:'20xx-yy-zz hh:mm:ss'
```

2. すべての論理ドメインにダミー変数を設定し、クリアします。
すべての論理ドメインに対して、以下のコマンドを実行します。

```
primary# ldm set-variable fix-php=true ldom
primary# ldm remove-variable fix-php ldom
```

3. 変更した構成をXSCFに保存し、現在の構成情報を置き換えます。
ここでは、現在の構成情報名「config1」を置き換える場合を例に説明します。

```
primary# ldm remove-spconfig config1
primary# ldm add-spconfig config1
```

4. すべての論理ドメインを再起動します。

「SCF Diagnosis initialize RTC」エラーの誤検出に対する復旧方法 (RTIF2-131107-002)

[復旧方法]

- 現象1が発生した場合
 - a. Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻を再設定するため、**setdate(8)**コマンドを実行してください。このとき、XSCFがリセットされます。その後、PPARの電源を切断後再投入してください。
 - b. Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日ではないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上で**resetdateoffset(8)**や**setdate(8)**コマンドは実行しないでください。
 - c. PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のa.またはb.を実施してください。
- 現象2が発生した場合
 - a. Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日に戻っているときは、XSCFの時刻とすべてのPPARのハイパーバイザ間で生じている不正な時刻の差分を初期化する必要があります。すべてのPPARを停止し、**resetdateoffset -a**コマンドを実行して、時刻の差分をクリアしてください。

- b. Oracle Solarisの時刻が1970年1月1日でないときは、保守作業員に連絡してください。このとき、XSCF上でresetdateoffset(8)やsetdate(8)コマンドは実行しないでください。
 - c. PPARの電源が切断されているときは、PPARの電源を投入してください。その後、Oracle Solarisの時刻を確認し、上記のa.またはb.を実施してください。
- 現象3が発生した場合
 現象1または現象2も発生している場合、まず、それらの[復旧方法]を実施してください。
 Oracle Solarisの時刻を設定しなおしてください。

XCP 2050より前の版数で解決された不具合

XCP 2050より前の版数で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121113-001	○	○	○	setsmtp(8)コマンドでユーザー名に無効な値を設定したあと、テストメールを送信するためにsetemailreport(8)コマンドを実行すると、返信アドレス(Reply address)にメールが正しく送信されたように表示されます。	有効な回避方法はありません。テストメールが正しく送信されたように表示されますが、メールは送信されません。
RTIF2-121113-002	○	○	○	setaudit deleteコマンドを実行し、viewaudit(8)コマンドで監査ログを表示すると、一部の監査ログが削除されていないことがあります。	有効な回避方法はありません。
RTIF2-121113-006	○	○	○	XSCF Webメニューを使わずに別ウィンドウや別タブにXSCF Web画面を表示すると、正常に表示されないことがあります。	XSCF Webの画面表示操作はメニューツリーを使用してください。

表 3-7 XCP 2050 より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121113-007	○	○	○	XSCFが起動中、プロセスダウン、パニックまたはwatchdogタイムアウトが発生し、XSCFがリセットする場合があります。	XSCFが起動されていることを確認してください。 起動されていない場合は、物理パーティション (PPAR) の電源を切断したあと、システムの入力電源を切断してから再投入 (AC OFF/ON) してください。 システムの入力電源を再投入する場合は、電源を切断したあと30秒以上待ってから投入してください。 システムの入力電源を切断後再投入しても、XSCFが起動されない場合は、CPUメモリユニット (CMU) を交換してください。
RTIF2-121113-009	○	○	○	XSCFが動作中、プロセスダウン、パニックまたはwatchdogタイムアウトが発生し、XSCFがリセットしても再起動されないことがあります。	XSCFが起動されていることを確認してください。 起動されていない場合は、物理パーティション (PPAR) の電源を切断したあと、システムの入力電源を切断してから再投入 (AC OFF/ON) してください。 システムの入力電源を再投入する場合は、電源を切断したあと30秒以上待ってから投入してください。 システムの入力電源を切断後再投入しても、XSCFが起動されない場合は、CPUメモリユニット (CMU) を交換してください。
RTIF2-121113-011	○	○	○	showsnp(8)コマンドを実行すると、以下のメッセージが表示され、snmpデーモンが終了していることがあります。 Agent Status: Disabled	再度、showsnp(8)コマンドを実行し、snmpデーモンが再起動されているか確認してください。 「Agent Status: Disabled」のままであれば、setsnp enableコマンドを実行し、snmpデーモンを再起動してください。
RTIF2-121113-014	○	○	○	XSCF起動中に、「/etc/redhat-release not found」のエラーメッセージが表示されます。	このメッセージは無視してください。
RTIF2-121113-018	○	○	○	replacefru(8)コマンドでFRUを交換したとき、構成変更を表すメッセージ「configuration changed (...)」が複数回、イベントログに登録されることがあります。	2回目以降のメッセージは無視してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121113-019	○	○	○	電源スケジュールにより物理パーティション (PPAR) の電源を切断したとき、パワーログに表示される要因 (Cause) が「-」と表示されることがあります。	有効な回避方法はありません。
RTIF2-121113-021	○	○	○	XSCFボードにある時計の故障で、時刻が正しく読めなかった場合、時計の故障を表すエラーがエラーログに記録されないことがあります。	有効な回避方法はありません。 poweron(8)コマンドを実行し、以下のメッセージが表示された場合、XSCFボードの時計が故障しています。XSCFボードを交換してください。 Poweron canceled due to invalid system date and time.
RTIF2-121113-022	○	○	○	オペレーションパネルが故障または接続されていない場合、XSCFを起動できません。	オペレーションパネルを接続してください。故障している場合は交換してください。
RTIF2-121113-023 RTIF2-121113-028	○	○	○	ハイパーバイザ動作中にCPUの故障が発生した場合、物理パーティション (PPAR) のリセットが複数回行われ、PPARの再起動に時間がかかることがあります。	有効な回避方法はありません。
RTIF2-121113-025	○	○	○	CPUの故障が発生したとき、Oracle Solaris上で、縮退やオフラインを表すエラーメッセージがSyslogに出力されないことがあります。	showlogs(8)コマンドを使用し、XSCF上で故障状態を確認してください。
RTIF2-121113-027	○	○	○	ファームウェアアップデート後、XSCFを再起動しない状態で、XSCF WebによりXCPをアップロードすると、XCPのアップロードが失敗し、XSCF Webがセッションタイムアウトします。	ファームウェアアップデート後、続けてXSCF WebでXCPをアップロードする場合は、XSCFを再起動してください。
RTIF2-121113-031	○	○	○	Oracle VM Server for SPARCでPCIカードを割り当てたI/Oドメインを作成後、I/Oドメインの電源を投入し、okプロンプトの状態ですべて停止させた場合、XSCFのshowhardconf(8)コマンドでPCIカードの構成情報が表示されないことがあります。	Oracle VM Server for SPARCでPCIカードを割り当てた論理ドメインのOracle Solarisを起動してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121129-001	○	○	○	<p>XSCFファームウェア動作中に、「System backup memory access error」というPSUBPバックプレーン (PSUBP) のエラーが誤検出され、エラーログに登録されることがあります。この誤検出が物理パーティション (PPAR) 起動処理中に発生すると、PPARの起動に失敗する場合があります。また、ログ情報の採取中に発生すると、ログ情報の採取に失敗します。さらに、エラーの誤検出とともにPSUBPに故障マークがつく場合があります。PSUBPに故障マークがつくと、PPARの起動に必要な資源が足りないため、PPARの起動が要求されたときに、PPARの起動に失敗したことを表すログがパワーログに登録されます。パワーログは <code>showlogs power</code> コマンドで表示できます。</p>	<p>「説明」に記載したログを発見したら、<code>showstatus(8)</code>または<code>showhardconf(8)</code>コマンドを実行し、PSUBPに故障マークがついているかどうか確認します。[PSUBPに故障マークがついていない場合] ハードウェアに問題は発生していないため、エラーログを無視して、そのまま運用を継続してください。 [PSUBPに故障マークがついている場合] 以下の手順で故障マークをクリアしてください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オペレーションパネルのモードスイッチをServiceモードに切り替えます。 2. 対象となるSPARC M10システムの筐体の電源を切断したあと再接続して、XSCFを再起動します。M10-4Sの場合はすべてのSPARC M10-4S筐体の電源を切断したあと再接続します。 3. XSCFが再起動したら、オペレーションパネルのモードスイッチは元の位置に戻します。 <p>XSCFを再起動しても同じエラーが発生する場合は、誤検出ではなく、PSUBPのハードウェア故障である可能性があります。この場合は、保守作業員に依頼し、PSUBPを交換してください。</p>
RTIF2-121129-002	○	○	○	<p>CPUメモリユニット (CMU) またはマザーボードユニット (MBU) を交換した場合、XSCFのユーザーアカウント情報が消去されることがあります。XSCFユーザーアカウント情報を元に戻すには、<code>dumpconfig(8)</code>コマンドで退避しておいた設定情報を、<code>restoreconfig(8)</code>コマンドで復元する必要があります。</p>	<p>交換実施後、<code>dumpconfig(8)</code>で退避しておいた設定情報を <code>restoreconfig(8)</code>コマンドで復元するか、または、XSCFのユーザーアカウント情報を再設定してください。</p>

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121129-004	○	○	○	restoredefaults(8)コマンドは以下の情報を初期化できません。設定情報がそのまま残ってしまいます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCFのタイムゾーン ■ HTTPSのサーバ証明 	有効な回避方法はありません。settimezone(8)コマンド、sethttps(8)コマンド、setssh(8)コマンドで再設定してください。
RTIF2-121130-001	○	○	○	RCILによる電源連動設定を有効から無効に設定後、さらに有効に設定した場合、ETERNUS DX80/DX90/DX410/DX440/DX8100/DX8700 S2の電源連動が働かない場合があります。	RCILによる電源連動設定を有効から無効に設定したあと、XSCFを再起動してください。
RTIF2-121204-001	○	○	○	ダイナミックリソース管理ソフトウェア (ServerView Resource Orchestrator) で監視対象サーバの登録に失敗することがあります。	有効な回避方法はありません。ダイナミックリソース管理ソフトウェアで監視対象サーバを登録しなおしてください。
RTIF2-121204-002	○	○	○	PRIMECLUSTERでノードが停止したときに、自動的にノードを切り替えることができません。	有効な回避方法はありません。PRIMECLUSTERに対して、ノードを手動で切り替えてください。
RTIF2-121204-003	○	○	○	OpenBoot PROMのsetenvやnvramrc、Oracle Solarisのeeprom(1M)コマンドやldm set-varコマンドで設定または変更したOpenBoot PROM環境変数は、システムの電源を再投入すると保持されないことがあります。	OpenBoot PROM環境変数を更新したあとは、ldm add-configコマンドを実行して、ドメイン構成情報をXSCFに保存してください。
RTIF2-121204-004	○	○	○	XSCFのsetpparmode(8)コマンドを使用してゲストドメインのオートブート機能を有効にしたあと、制御ドメインとゲストドメインを同時に起動すると、ゲストドメイン上で以下のエラーログが登録され、ゲストドメインのOracle Solarisが起動できないことがあります。 Code: 20000000-00ffff0000ff0000ff-03000000200000000000000000 Status: Notice Occurred: Nov 16 16:55:25.518 JST 2012 FRU: /UNSPECIFIED Msg: Boot process failed	XSCFのsetpparmode(8)コマンドを使用してゲストドメインのオートブート機能を無効にしたあと、制御ドメインのOracle Solarisを起動してから、Oracle VM Server for SPARCのldm startコマンドを使用してゲストドメインを起動してください。 [復旧方法] Oracle VM Server for SPARCのldm stopコマンドを使用してゲストドメインを停止したあと、ldm startコマンドを使用してゲストドメインを起動してください。
RTIF2-121206-001	○	○	○	ドメイン起動時に以下のエラーメッセージが出力されることがあります。 Msg: PCI Express link not active	showhardconf(8)コマンドでPCI Express (PCIe) カードが認識できている場合は、このメッセージは無視してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121219-002			○	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムの電源ケーブルを接続するとき、すべての電源ケーブルを4分以内で接続しないと、一部の筐体が認識されないことがあります。	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムの場合は、すべての電源ケーブルを接続し終えるのに4分を超えないようにしてください。 認識されないSPARC M10-4Sの筐体がある場合は、再度、すべての筐体の電源ケーブルを抜き挿ししてください。
RTIF2-121219-004	○	○	○	電源連動グループの電源投入/切断中は、 showremotepwrmgmt(8) コマンドが以下のメッセージで異常終了することがあります。 Controller response timeout.	再度、 showremotepwrmgmt(8) コマンドを実行してください。
RTIF2-121219-005	○	○	○	部品の高温度異常 (High temperature) または吸気低温異常 (Low temperature at air inlet) が登録されたとき、FRUで表示される2番目の故障部品 (第二被疑部品) の情報が正しくありません。	表示される2番目の故障部品 (第二被疑部品) の情報は無視してください。
RTIF2-121219-006	○	○	○	replacefru(8) コマンドを使用した電源ユニット (PSU) の交換が、「Warning:005」で失敗することがあります。	再度 replacefru(8) コマンドを実行して、PSUを交換してください。
RTIF2-121219-009	○	○	○	「Power-on failure」または「Power-off failure」のファン故障を表すエラーログが登録されたとき、故障対象のFRUとして誤った部品が表示されることがあります。	「Power-on failure」または「Power-off failure」で、故障部品がファンのときは、以下の部品を交換してください。 <ul style="list-style-type: none"> ■ SPARC M10-1の場合 マザーボードユニット(MBU) ■ SPARC M10-4/M10-4Sの場合 PSUバックプレーン
RTIF2-121219-010			○	switchscf(8) コマンドを実行したとき、「XSCF hang-up is detected」のエラーログが登録されることがあります。	このエラーログは無視してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121219-012			○	replacefru(8)コマンドを使用して、SPARC M10-4Sの筐体を交換したとき、「internal error」が表示されて筐体の交換に失敗することがあります。	replacefru(8)コマンドによりSPARC M10-4Sの筐体を交換する場合は、以下の手順で作業を実施してください。 <ol style="list-style-type: none"> 1. replacefru(8)コマンド実行後に表示される「Do you want to continue?[r:replace c:cancel]」に対して、交換のため「r」を入力します。 2. SPARC M10-4Sの筐体を交換し、筐体の入力電源を投入後、約15分間待ちます。 3. showlogs eventコマンドを実行し、イベントログを表示します。 4. 以下のどちらかの方法で交換作業を続けます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ イベントログに「XSCF update is started」と表示された場合 「XCP update has been completed」のログが登録されるまで待ちます。「XCP update has been completed」が表示されたら、「Please select[f:finish]」に「f」を入力し、画面に従って交換作業を続けます。 ■ イベントログに「XSCF update is started」と表示されない場合 「Please select[f:finish]」に「f」を入力し、画面に従って交換作業を続けます。
RTIF2-121219-013			○	XSCFが起動できない故障が発生した場合、エラーとなったSPARC M10-4Sの筐体に対するエラーログだけではなく、存在しない筐体に対してケーブル接続の異常に関するエラーログが登録されることがあります。	存在しないSPARC M10-4Sの筐体に対して登録された、ケーブル接続の異常に関するエラーログは無視してください。
RTIF2-121219-014			○	BB#00の故障で停止交換（入力電源を切断して交換）を実施すると、XSCFの設定情報が消去されてしまいます。	BB#00の故障でSPARC M10-4Sの筐体を交換する場合は、replacefru(8)コマンドを実行して交換してください。
RTIF2-121219-015			○	initbb(8)コマンドでSPARC M10-4Sの筐体を減設した場合、減設した筐体の情報が完全に消去されずに残ってしまいます。	SPARC M10-4Sを減設する場合は、停止減設（入力電源を切断して減設）を実施してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-121219-016	○	○	○	物理パーティション (PPAR) の電源を投入中、電源を切断中、またはリセット中に、prtfru(8) コマンドを実行すると、「internal error」となることがあります。	PPARの電源投入や電源切断、リセットが完了するのを待ってから、prtfru(8)コマンドを再度実行してください。
RTIF2-121219-017			○	BB#00またはBB#01でメモリ故障が発生してエラーログが登録されたあとに、SPARC M10-4Sの筐体の電源を切断すると、再度同じエラーログが登録されることがあります。	有効な回避方法はありません。
RTIF2-121219-018			○	2台以上のSPARC M10-4Sが、複数の物理パーティション (PPAR) で構成されているシステムにおいて、以下のいずれかの事象によりマスタXSCFの切り替えが行われたあと、PPARの電源を投入すると、「STICK does not start (CPU)」、 「STICK does not start (MBC)」、 または「STICK count up error」のエラーログが登録され、CPUメモリユニット (CMUU/CMUL) が縮退される場合があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ファームウェアアップデート実施 ■ XSCFの故障検出 ■ switchscf(8)コマンドの実行 	有効な回避方法はありません。マスタXSCFの切り替えが行われたあと、PPARの電源を投入しないで、すべてのSPARC M10-4Sの入力電源を切断し、再投入してください。マスタXSCFの切り替えが行われたあと、PPARの電源を投入して「STICK does not start (CPU)」、「STICK does not start(MBC)」または「STICK count up error」のエラーログが登録され、部品に故障マーク (*) が表示された場合は、保守作業員にお問い合わせください。
RTIF2-121219-019	○	○	○	PCIボックスに搭載されたPCIカードを挿入または抜去したとき、対象のPCIカードの番号 (PCI#) とは異なる番号がログに表示されてしまいます。また、PCIボックスのPCIeスロットやPCIカードの故障で、「PCICARD failed」のエラーログが登録されたとき、対象のPCIカードの番号 (PCI#) とは異なる番号がエラーログに表示されてしまいます。	ログに表示されるPCI番号 (PCI#)に、1を引いた番号で読み替えてください。
RTIF2-130109-002			○	複数のシステムボード (PSB) で物理パーティション (PPAR) が構成されたシステムで、イベントログに「Console path is switched」が登録された場合、PPAR-IDに不当な値が表示されることがあります。	有効な回避方法はありません。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130109-005	○	○	○	replacefru(8)コマンドを使用して、電源ユニット (PSU) を交換すると、エラーログに「Indispensable parts are not installed (PSU)」が登録されることがあります。	このエラーログは、PSUが抜去されたことにより登録されたログです。無視してください。
RTIF2-130109-006			○	スタンバイ状態のXSCFが故障中または起動中に、電源連動機能の設定情報を変更した場合、スタンバイ状態のXSCFの起動が完了しても、変更した設定情報はスタンバイ状態のXSCFに反映されていないことがあります。この状態でXSCFの切り替えが発生すると、切り替え後のマスタXSCFから、変更後の設定情報で電源連動ができないことがあります。	電源連動機能を無効にしたあと、以下の手順で、電源連動機能を設定しなおしてください。 <ol style="list-style-type: none"> 1. setremotepwrmgmt -c disable コマンドを実行し、電源連動機能を無効にします。 2. 管理ファイルを退避したあと、clearremotepwrmgmt(8)コマンドを使用して、設定情報を初期化します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ スタンバイ状態のXSCFが起動中の場合は、起動が完了してからclearremotepwrmgmt(8)コマンドを実行します。 ■ スタンバイ状態のXSCFが故障中の場合は、replacefru(8)コマンドを使用して対象FRUを交換してから、clearremotepwrmgmt(8)コマンドを実行します。 3. スタンバイ状態のXSCFの起動が完了したら、退避した管理ファイルを元に設定情報を復元するために、setremotepwrmgmt -c config コマンドを実行します。 4. setremotepwrmgmt -c enable コマンドにより電源連動機能を有効にします。
RTIF2-130109-007	○	○	○	すべての物理パーティション (PPAR) が停止している状態からPPARの電源を投入した場合、エラーログが登録されず、PPARの電源が投入できないことがあります。	有効な回避方法ははありません。すべてのSPARC M10システムの筐体で、入力電源を切断後、再投入してから、PPARの電源を投入しなおしてください。
RTIF2-130130-001		○	○	CPUメモリエニット (上段) (CMUU) が搭載されていないシステム構成でAC ONすると、CMUUに対する「Hardware access error」のエラーログが発生します。SPARC M10-4Sの増設や交換時も、同様の現象が発生します。	CMUUが搭載されていないことにより登録されたエラーログのため、無視してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130212-001			○	<p>setpparmode(8)コマンドで設定する省電力動作が「有効」の場合、以下の問題が発生することがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 論理ドメインのハングアップ（ハートビート機能）を検出できないことがある ■ システム起動中（物理パーティション（PPAR）動作中）に、CPUコアのCoDリソースを削減した場合、PPARの電源が切断されることがある。 	setpparmode(8)コマンドで省電力動作を「無効」に設定してください。
RTIF2-130212-002	○	○	○	<p>Oracle Solarisからldm add-sponfigコマンドを実行したあと、XSCFからshowdomainstatus(8)コマンドでドメインの状態を確認すると、制御ドメインを含めたすべてのドメインが「Host stopped」と表示されます。</p>	<p>Oracle Solarisからldm add-sponfigコマンドを実行したあと、XSCFからshowdomainstatus(8)コマンドでドメインの状態を確認すると、制御ドメインを含めたすべてのドメインが「Host stopped」と表示されます。</p>
RTIF2-130212-003	○	○	○	<p>testsb(8)またはdiagxbu(8)コマンドで診断中のシステムボード（PSB）に対して、別セッションでtestsb(8)コマンドを実行すると、診断対象のPSBが異常状態となり、PSBが使用できなくなることがあります。</p>	<p>testsb(8)コマンドを実行する前に、showboards(8)コマンドを使用して、診断対象となるPSBのPWRが「n」であることと、Testが「Testing」でないことを確認してください。</p> <p>PSBが使用できなくなってしまう場合は、システム全体の電源を切断後、再投入してください。</p>
RTIF2-130215-001			○	<p>ハードウェア初期診断で以下のエラーログによるシステムボード（PSB）異常が検出されたあと、PSBが縮退されずに物理パーティション（PPAR）のリセットを繰り返すことがあります。</p>	deleteboard(8)コマンドを使用して、異常が検出されたPSBをPPAR構成から切り離してください。
				<p>Code: 40002000-003cff0000ff0000ff-02000e000000000000000000 FRU: /BB#x Msg: SB deconfigured (SB-SB access error)</p> <p>Code: 40002000-003cff0000ff0000ff-02000e010000000000000000 FRU: /BB#x Msg: SB deconfigured (not running)</p>	

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130215-002	○	○	○	setpctl(8)コマンドでpolicyをpsbに設定しても、異常発生時の縮退範囲がシステムボード単位とならずに、部品 (FRU) 単位となることがあります。	deleteboard(8)コマンドを使用して、異常が検出されたPSBをPPAR構成から切り離してください。
RTIF2-130219-001			○	電源連動グループの管理ファイルで設定できる「IPAddress」と「SlaveAddress」の値に、XSCFの引き継ぎIPアドレスを指定することができません。	「IPAddress」と「SlaveAddress」の値には、マスタXSCFとスタンバイ状態のXSCFの、XSCF-LAN#0またはXSCF-LAN#1のIPアドレスをそれぞれ指定してください。
RTIF2-130219-005		○	○	物理パーティション (PPAR) 内の部品で故障が発生すると、SNMP MIBのPPARの状態が更新されません。	有効な回避方法ははありません。
RTIF2-130219-008			○	複数の物理パーティション (PPAR) で構成されたシステムで、PPARの電源を投入しているときに、あるSPARC M10-4Sの入力電源を投入すると、入力電源の投入されたSPARC M10-4SがマスタXSCFで認識されないことがあります。	PPARの電源を投入する前に、構成するすべてのクロスバーボックスやSPARC M10-4Sの入力電源を投入してから、PPARの電源を投入してください。
RTIF2-130227-001			○	snapshotを採取する場合、-aオプションを指定すると、マスタXSCFの負荷が上昇して、「XSCF Kernel Panic」が発生することがあります。	システム全体のsnapshotを採取する場合は、-aオプションではなく、-bオプションでSPARC M10-4SのBB-IDを指定して、1台ずつ採取してください。この作業をすべてのSPARC M10-4Sに対して実行してください。
RTIF2-130305-005			○	複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムで、物理パーティション (PPAR) の電源投入後のPOSTによる診断の処理中に、あるSPARC M10-4SでXSCFパニックが発生すると、PPARの電源投入処理が継続されずに電源が切断されることがあります。	有効な回避方法ははありません。各SPARC M10-4SのXSCFが再起動されているかどうかを確認してください。再起動されている場合は、PPARの電源を投入しなおしてください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130305-008			○	複数のSPARC M10-4Sとクロスバーボックスで構成されたシステムで、すべての物理パーティション (PPAR) がそれぞれ1つのシステムボード (PSB) で構成されているとき、あるPPARの電源を投入すると、クロスバーボックスのクロスパーユニットの電源が投入抑止されず、クロスバーボックスの電源も投入されてしまいます。	有効な回避方法はありません。
RTIF2-130305-010			○	4台以上のSPARC M10-4Sが複数の物理パーティション (PPAR) で構成されているシステムで、 poweron -a コマンドを使用して、すべてのPPARの電源を投入すると、ハイパーバイザアポートまたはOSパニックが発生することがあります。	poweron -a コマンドを使用して、すべてのPPARの電源を同時に投入しないでください。 -p オプションを使用して、PPAR単位で電源を投入してください。
RTIF2-130305-013	○	○	○	XSCFが起動中、プロセスダウン、パニックまたはwatchdogタイムアウトが発生し、XSCFがリセットする場合があります。	XSCFが起動されていることを確認してください。 起動されていない場合は、物理パーティション (PPAR) の電源を切断したあと、システムの入力電源を切断してから再投入 (AC OFF/ON) してください。 システムの入力電源を再投入する場合は、電源を切断したあと30秒以上待ってから投入してください。 システムの入力電源を切断後再投入しても、XSCFが起動されない場合は、CPUメモリユニット (CMU) を交換してください。
RTIF2-130305-021			○	XSCF起動直後、システムボード (PSB) が「Unmount」として認識されてしまい、 addboard(8) コマンドや poweron(8) コマンドに失敗することがあります。	XSCF起動直後は30秒ほど待機するとともに、 showboards(8) コマンドで対象のPSBが搭載されていることを確認してから、 addboard(8) や poweron(8) コマンドを実行してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130305-024			○	クロスバーボックスを含むシステムにおいて、物理パーティション (PPAR) の電源が投入された状態でクロスバーボックスの入力電源を切断後再投入すると、制御ドメインコンソールに以下のメッセージが出力され、PPARの電源処理が完了しないことがあります。 WARNING: Unable to connect to Domain Service providers	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] PPARの電源処理が中断した場合は、 <code>poweroff -f</code> コマンドを使用して、PPARの電源を強制的に切断してください。 その後、 <code>rebootxscf -a</code> コマンドを使用して、すべてのXSCFをリセットするか、すべてのSPARC M10-4S筐体の入力電源を切断したあと、再投入してください。
RTIF2-130319-001		○	○	SPARC M10-4/M10-4Sの入力電源を投入した直後に、まれに「DMA timeout error Hard detected」が検出されることがあります。「DMA timeout error Hard detected」が検出された状態で論理ドメインを起動するとCPUメモリユニット (下段) (CMUL) が縮退します。	有効な回避方法はありません。 論理ドメインを起動する前に、入力電源を切断後、再投入してください。 論理ドメインを起動させたあと、CMULの縮退された状態が解消しない場合は、保守作業員にお問い合わせください。
RTIF2-130329-001			○	SPARC M10-4Sでのファームウェアアップデート中に、マスタ筐体のALARM LEDが突然点灯して停止したままの状態となり、ファームウェアアップデートが完了しないことがあります。	有効な回避方法はありません。
RTIF2-130329-002			○	クロスバーボックス2台以上の構成で、かつ、クロスバーボックスを使用しない物理パーティション (PPAR) 構成の場合、オペレーションパネルから電源が切断できません。	<code>poweroff(8)</code> コマンドを使用して電源を切断してください。
RTIF2-130329-003	○	○	○	物理パーティション (PPAR) のステータスがPowerOn (Oracle Solaris OS起動後、PowerOffが完了するまでの間) 状態で入力電源を切断すると、次回入力電源を投入するときに、PPAR内のいずれかのSPARC M10-4Sで「SRAM serious error」が発生し、入力電源が投入できなくなります。	入力電源を切断するときは事前にPPARの電源を切断して、切断が完了したことを確認してから実施してください。 また、不具合が発生してしまった場合は、以下の手段で復旧してください。 1. <code>dumpconfig(8)</code> コマンドで設定を保存します。 2. <code>restoredefaults -c factory</code> コマンドでシステムを工場出荷状態に戻します。 3. <code>restoreconfig(8)</code> コマンドで設定を復元します。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130410-004	○	○	○	オペレーションパネルから電源の投入/切断ができないことがあります。	XSCFシェルから、電源を投入する場合はpoweron(8)コマンド、切断する場合はpoweroff(8)コマンドを実行してください。 [復旧方法] 事象が発生した場合は、poweroff -fコマンドを使用して、物理パーティション (PPAR) の電源を切断してください。
RTIF2-130410-005			○	複数の物理パーティション (PPAR) で構成されているシステムで、1つ以上のPPARの電源が投入されている場合、または1つ以上のPPARが故障している場合に、poweron -aコマンドを実行すると、電源の投入に失敗します。	-pオプションを指定してpoweron(8)コマンドを実行し、PPARごとに電源を投入してください。 [復旧方法] 事象が発生した場合は、電源の投入が途中で止まってしまったPPARに対して、poweroff -fコマンドを実行し、強制的に電源を切断してください。そのあと、poweron -pコマンドを実行し、PPARの電源を投入してください。
RTIF2-130410-006			○	以下のすべての条件を満たしたシステムでクロスバーボックスが故障した場合、クロスバーボックスが縮退し、動作が継続できないことがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ クロスバーボックスが2台以上で構成されている。 ■ 複数のPPARで構成されている。 ■ 各物理パーティション (PPAR) が複数のCPUメモリユニット (CMUU/CMUL) で構成されている。 	有効な回避方法はありません。 [復旧方法] poweron -pコマンドを実行して、クロスバーボックスの故障によって電源が切断されたPPARの電源を再度投入してください。
RTIF2-130410-007			○	電源を投入した直後の物理パーティション (PPAR) の電源を、poweroff -fコマンドを使用して強制的に切断すると、以降の電源の投入/切断ができなくなることがあります。	PPARの電源を投入したあとは、okプロンプトが表示されるまで、poweroff -fコマンドを実行しないでください。 [復旧方法] PPARの電源の強制切断に失敗した場合は、入力電源を切断後、再投入 (AC OFF/ON) してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130415-001		○	○	SPARC M10-4/M10-4Sにおいて、ファームウェア版数がXCP 2031またはXCP 2032の場合、下記のOpenBoot PROM環境変数の初期値が、デフォルトと異なる値となっています。 XSCFシェルのsetpparparam(8)コマンドやOpenBoot PROMプロンプトからsetenvコマンドを使用して設定値を変更しても、値が元に戻ってしまいます。 auto-boot? false diag-switch? true fcode-debug? true local-mac-address? false	有効な回避手段はありません。 XCP 2041版以上の版数にファームウェアアップデートしてから、OpenBoot PROM環境変数の値を設定しなおしてください。
RTIF2-130416-001	○	○	○	I/OドメインのPCIデバイスを削除 (ldm rm-io) または追加 (ldm add-io) した場合、I/Oドメイン起動時にハイパーバイザアボートが発生することがあります。	I/OドメインのPCIデバイスを削除する場合は、削除対象のPCIデバイスと同一のルートコンプレックス配下 (/pci@xxxxのxxxxが同じ) の全デバイスをいったん削除してから、必要なデバイスを追加しなおしてください。 または、同一ルートコンプレックス配下の複数のデバイスを、1つのI/Oドメインに割り当てないようにしてください。
RTIF2-130417-001			○	クロスパーボックスに搭載されているXSCFがパニックした場合、マスタXSCFとマスタ以外のXSCFとの通信ができなくなることがあります。	有効な回避策はありません。 [復旧方法] 事象が発生した場合、15分以上間を空けてから、rebootxscf -sでマスタXSCFをリセットしてください。
RTIF2-130507-001	○	○	○	ハードウェアRAID機能を使用中に停電が発生した場合、復電後にRAIDボリュームが認識できないことがあります。	okプロンプトでactivate-volumeコマンドを実行し、ハードウェアRAIDボリュームを有効化してください。 手順の詳細は「SPARC M10 システムシステム運用・管理ガイド」の「12.2.8 ハードウェアRAIDボリュームを再有効化する」を参照してください。

表 3-7 XCP 2050より前の版数で解決された不具合 (続き)

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130515-001	○	○	○	<p>システム稼働中の状態で、以下の現象が発生することがあります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. prtpiclコマンドが応答しなくなる。 2. prtpicl -v、prtdiag -vの表示データ (XCP版数など) が期待どおりに出力されない。 3. /var/adm/messagesに、「PICL snmpplugin: cannot fetch object value」のワーニングメッセージが出力される。 4. XSCFのCMDDプロセスダウンが発生し、XSCFがリセットを繰り返して使用できなくなる。このときシステムの運用は継続できます。 	<p>有効な回避方法はありません。</p> <p>[復旧方法] 現象1.が発生した場合は、以下の手順で復旧します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. prtdiag(1M)コマンドを [Ctrl-C]で終了します。 2. 約30分放置して、XSCFでSNMPのタイムアウトを発生させます。 3. 制御ドメイン上でsvcadm (1M)コマンドを実行して、piclサービスを再起動させます。 <p>現象2.が発生した場合は、再度コマンドを実行して、結果が表示された場合はシステムを継続して運用できます。結果が期待どおりに表示されない状態が続く場合は、XSCFが動作しているか確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ XSCFが動作している場合は、rebootxscf(8)コマンドでXSCFをリセットします。 ■ XSCFが動作していない場合は、システムの入力電源を切断してから再投入 (AC OFF/ON) して復旧します。 <p>現象3.が発生した場合は、一時的なワーニングメッセージであるため、システムを継続して運用できます。</p> <p>現象4.が発生した場合は、システムの入力電源を切断してから再投入 (AC OFF/ON) して復旧します。</p>
RTIF2-130612-001			○	<p>XCPファームウェアの版数がXCP 2041、XCP 2042、またはXCP 2043の場合、複数のSPARC M10-4Sで構成されたシステムでは、replacefru(8)コマンドによるSPARC M10-4Sの交換ができません。</p>	<p>停止交換 (入力電源を切断して交換) を実施するか、XCPファームウェア版数をXCP 2044以降にアップデートしてから交換してください。</p>

Oracle Solarisに関する不具合と回避方法

ここでは、Oracle Solarisに関する不具合と回避方法をバージョンごとに記載します。

すべてのバージョンのOracle Solarisに関する不具合と回避方法

サポートされているすべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法を、以下の表に示します。

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
15812880			○	メモリを8000 GB (約7.8 TB) 以上搭載しているドメインに、telnetやsshで接続しようとする時、接続先の制御ドメインコンソールに以下のようなメッセージが表示され、接続できなくなります。 <ul style="list-style-type: none">sshの場合 error: /dev/ptmx: Not enough space error: session_pty_req: session 0 alloc failedtelnetの場合 telnetd: open /dev/ptmx: Not enough space	これは、Solaris 11.1 SRU3.5.1、およびOracle Solaris 10のパッチ148888-04で修正されました。 [回避方法] 以下のコマンドを実行して、ptmx_ptymaxを変更してください。 [例] # echo "ptms_ptymax/Z0x400000" mdb -kw ptms_ptymax: 0 = 0x400000
15813959 15813960 (7196117)	○	○	○	SPARC M10システムで、hotplug(1M)によってPCIボックスを追加した場合、PCIボックス上のデバイスが認識されません。	hotplug(1M)でPCIボックスの追加する場合は、あらかじめ/etc/systemファイルに以下の1行を追加後、Oracle Solarisを再起動してから実施してください。 set pcicfg:pcicfg_slot_busnums = 4

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
15822113	○	○	○	シェルスクリプトなどでldm add-vcpu、ldm remove-vcpuを繰り返し実行すると、実行しているプロセスがコアダンプで異常終了することがあります。	これは、SRU11.1.7.5.0で修正されました。 SRUが適用されていないことが原因でこの不具合が発生した場合は、再度コマンドを実行してください。 また、ldm remove-vcpuを実行する場合は、プロセスの負荷が低い状態で実行するようにしてください。
15825208	○	○	○	SPARC M10 システムにおいて、Oracle Solarisのscp(1)、sftp(1)、ssh(1)コマンドがエラーになったり、Oracle RACのインストールに失敗したりすることがあります。	これは、Solaris 11.1 SRU 1.4で修正されました。 [回避方法] 「Oracle Solarisのscp(1)、sftp(1)、ssh(1)コマンドがエラーになったり、Oracle RACのインストールに失敗したりする (CR:15825208)」を参照してください。
15826052	○	○	○	PCIホットプラグ (PHP) 機能を使用して、Quad Gigabit Ethernetカード (SE1X7GQ2F) を、PCIボックス内のPCI-Expressスロットに増設することはできません。	これは、XCP 2050とSRU11.1.6.4.0で修正されました。 XCP 2050については、RTIF2-130528-001の記述を参照してください。 XCPおよびSRUが適用されていない場合は、増設対象の論理ドメインを停止してから、PCIカードを増設してください。
15840018	○	○	○	ファームウェアをXCP2031以降にアップデートすると、Oracle Solaris起動時に以下のメッセージが表示されます。 NOTICE: skipping unsupported token: fjoinrnum	これは、SRU11.1.6.4.0、およびOracle Solaris 10のパッチ148888-03で修正されました。 また、このメッセージを無視してもシステムに影響はありません。

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
15851224	○	○	○	I/Oドメイン起動時に以下のようなメッセージが出力され、パニックし続けることがあります。 recursive rw_enter, lp=XXXXXXXXX wwwwh=XXXXXXXXX thread=XXXXXXXXX	I/Oドメインの /etc/system に以下を追加して、Oracle Solaris を再起動してください。 forceload: drv/vpci なお、I/Oドメインが起動できない状態となっている場合は、I/Oドメインの仮想ディスクサービス (vds) の対象となる仮想ディスク (vdisk) を割り当てているゲストドメインを、ldm stop-domain、ldm unbind-domain コマンドにより inactive 状態へ移行してください。これにより、I/Oドメインが起動できますので、I/Oドメインを起動してから上記を設定してください。
15851441	○	○	○	メモリが故障して縮退すると、Oracle Solaris 起動時に以下のメッセージが出力され、パニックし続けることがあります。 tilelet_assign_fini_cb(): tile 0xX in memgrp X was unused また、ldm add-spconfig で論理ドメインの設定を保存したあとに、メモリのミラーモード設定をした場合にも発生します。	これは、SRU11.1.11.4.0 で修正されました。 [回避方法] 「メモリ縮退時に Oracle Solaris を起動するとパニックが発生することがある (CR:15851441)」を参照してください。

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
15858713 16769782	○	○	○	メモリ故障が発生して、ゲストドメインに割り当てたメモリがすべて縮退した場合、ldmd(1M)がコアダンプで異常終了し、ldm(1M)コマンドがエラー終了します。	<p>これは、SRU11.1.10.5.0で修正されました。</p> <p>SRUが適用されていないことが原因でこの不具合が発生した場合は、故障したメモリを交換してください。 故障したメモリを搭載したままOracle Solarisを起動したい場合は、XSCFから以下の手順で起動してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. poweroff(8)コマンドを使用し、物理パーティション (PPAR) の電源を切断します。 2. setdomainconfig(8)コマンドを実行し、PPARを factory-defaultの状態にします。 setdomainconfig -p ppar_id -c default 3. poweron(8)コマンドでPPARを起動します。 <p>制御ドメインのみの構成 (factory-default) でOracle Solarisが起動されます。</p>
15887244	○	○	○	SPARC M10 システムでSunVTS 7.0 ps14およびps15のテストを開始すると、エラーで終了することがあります。	<p>これは、Oracle Solaris 11.1 SRU4.6、およびOracle Solaris 10のパッチ149395-02で修正されました。</p> <p>修正を適用せずに回避する方法はありません。</p>

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
15823255			○	<p>以下の両方を満たす環境において、psradm(1M)やpsrset(1M)コマンドでCPUの割り当てを変更したり、ldm(1M)コマンドで仮想CPUの動的構成変更を行ったりすると、Oracle Solarisがパニックすることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 物理パーティション (PPAR) が2台以上のSPARC M10-4Sの筐体で構成されている場合 ■ 制御ドメインまたは論理ドメイン上でlgrpinfoコマンドを実行すると、以下のようなlgroupが存在する場合 <pre>「lgroup XX (intermediate):」 と表示されるlgroupのうち、 「Lgroup resources:」フィールドの「(CPU)」の前に数字が1つしかなく、 かつ、その数字が「(memory)」の直前に表示されていない場合 [例] # /usr/bin/lgrpinfo ... lgroup 12 (intermediate): Children: 10, Parent: 0 CPUs: 0 1 Memory: installed 520M, allocated 494M, free 26M Lgroup resources: 1 (CPU); 10 11 (memory) Latency: 21 ...</pre>	<p>これは、Solaris 11.1 SRU5.5で修正されました。</p> <p>[回避方法] /etc/system に以下の行を追加し、Oracle Solarisを再起動してください。</p> <pre>set mpo_disabled=1</pre>

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
16292272			○	<p>16BBで1つの物理パーティション (PPAR) を構成しているシステムで、ゲストドメインを多数構成すると、ゲストドメインのバインド処理に時間がかかります。</p> <p>バインド処理に要する時間の目安は、(すでにバインド状態のゲストドメイン数+1)×6+10秒です。したがって、バインド状態になっているドメインが1つもない状態から、<code>ldm bind-domain</code> コマンドでゲストドメインを1つずつバインド状態にすると、各バインド処理に要する時間を合計した時間がかかることになります。</p>	<p>これは、SRU11.1.6.4.0、およびOracle Solaris 10のパッチ150011-03で改善されました。</p> <p>なお、システムを1つのPPARで構成せずに、複数のPPARに分割してから、各PPARにゲストドメインを構成することを推奨します。</p> <p>上記の構成にすることにより、説明にあるような現象が軽減されるだけでなく、耐故障性の向上にもつながります。</p> <p>バインド処理の時間を短縮するためには、仮想ネットワークスイッチ (vsw) を設定している場合、<code>inter-vnet-link</code> をoffに設定することで、バインド処理の時間が約半分に短縮できます。なお、<code>inter-vnet-link</code> をoffに設定した場合の注意事項は、『Oracle VM Server for SPARC Administration Guide』や『Oracle VM Server for SPARC Release Notes』を参照してください。</p>

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
—	○	○	○	内蔵SASディスクドライブへのアクセスでエラーが検出されたときに、ディスクへのアクセスができなくなることがあります。	<p>内蔵HDDに対してMPxIO化する設定を行ってください。なお、Enhanced Support Facility 5.0以降が適用された場合、以下の操作は必要ありません。</p> <p>注—Enhanced Support Facility (ESF) は、日本国内で富士通から販売されたSPARC M10システムにだけサポートされます。</p> <p>[設定例]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 搭載されているHDDのプロダクト、モデルをformat(1M)コマンドで確認します。 # format 2. 内蔵HDDの情報を /kernel/drv/scsi_vhci.conf ファイルへ追加します。 <p>[scsi_vhci.confファイルの設定例]</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Solaris 11の場合 scsi_vhci-failover-override = "TOSHIBA MBF2600RC", "f_sym"; ■ Oracle Solaris 10の場合 device-type-scsi-options-list = "TOSHIBA MBF2600RC", "sym-opt"; sym-opt = 0x1000000; <ol style="list-style-type: none"> 3. stmsboot(1M)コマンドでMPxIOを有効化します。 # stmsboot -e

表 3-8 すべてのバージョンのOracle Solarisで発生しうる不具合と回避方法 (続き)

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
—	○	○	○	<p>10 Gigabit Ethernetカード (SPIX7HF1F) が搭載された論理ドメインで、OpenBoot PROM環境変数diag-switch?をtrueに設定していると、コンソールに以下のワーニングメッセージが出力されるとともに、エラーログに「Msg: Device error (FCode informed error)」が記録されます。</p> <p>WARNING: /pci@X,XXXXXX: FCODE mapin doesn't match decoded register type;</p> <p>また、showstatus(8)コマンドを実行すると、該当するPCIカードが搭載されたFRUに対して「Degraded」と表示されることがあります。</p>	<p>これらすべての出力は無視してください。</p> <p>これらの出力を回避する場合は、okプロンプトで以下のコマンドを実行し、OpenBoot PROM環境変数diag-switch?をfalseに設定してください。</p> <pre>setenv diag-switch? false</pre>

Oracle Solarisのscp(1)、sftp(1)、ssh(1)コマンドがエラーになったり、Oracle RACのインストールに失敗したりする (CR:15825208)

[回避方法]

以下の手順で、AES_CTR、AES_CBC_MAC、AES_CFB128アルゴリズムを暗号ユニットのアシスト機能で使用しないように設定を変更してください。

- クライアント機能で使用する場合 (scp(1)、sftp(1)、ssh(1)など)
 1. 対象ファイルに設定内容を1行で追加してください。スペースが必要なのは「Cipher」と「aes128-cbc」の間だけです。
 - 対象ファイル
 - システム全体の設定 : /etc/ssh/ssh_config
 - ユーザーごとの設定 : \$HOME/.ssh/ssh_config
 - 設定内容

```
Ciphers aes128-cbc,aes192-cbc,aes256-cbc,3des-bc,arcfour128,arcfour256,arcfour,blowfish-cbc
```

- サーバ機能で使用する場合 (sshd(1M)など)
 1. 対象ファイルに設定内容を1行で追加してください。
 - 対象ファイル
 - /etc/ssh/ssh_config
 - 設定内容 (推奨)

```
Ciphers 3des-cbc,arcfour128,arcfour256,arcfour,blowfish-cbc
```

2. 以下のコマンドでサービスを再起動してください。

```
# svcadm restart svc:/network/ssh:default
```

- クライアント機能、サーバ機能のいずれの場合も、上記設定でも解決しない場合
1. 上記の設定内容の代わりに以下を追加してください。

```
UseOpenSSLEngine no
```

メモリ縮退時にOracle Solarisを起動するとパニックが発生することがある (CR:15851441)

[回避方法]

メモリの故障によりパニックが発生した場合は、故障したメモリを交換してください。メモリミラーモードの設定によりパニックが発生した場合は、XSCFから以下の手順で起動してください。

メモリの故障によりパニックが発生した場合も、XSCFから以下の手順で起動すれば回避できることがあります。確実ではありません。以下の手順で起動してもパニックが発生する場合は、故障したメモリを交換してください。

1. **poweroff(8)**コマンドを使用し、物理パーティション (PPAR) の電源を切断します。
2. **setdomainconfig(8)**コマンドを実行し、PPARを**factory-default**の状態にします。

```
XSCF> setdomainconfig -p ppar_id -c default
```

3. **poweron(8)**コマンドを使用し、PPARを起動します。

制御ドメインのみの構成 (factory-default) でOracle Solarisが起動されます。メモリのミラーモードを設定する場合、factory-defaultの状態でもミラーモードを設定してから論理ドメインを構成し、ldm add-spcnfigで設定を保存してください。また、ミラーモードを使用している環境に、ミラーモード設定していない状態で保存した設定を、ldm set-configやXSCFのsetdomainconfig(8)コマンドで指定しないでください。

Oracle Solaris 10に関する不具合と回避方法

サポートされているOracle Solaris 10で発生しうる不具合と回避方法を、以下の表に示します。

表 3-9 Oracle Solaris 10で発生しうる不具合と回避方法

CR ID	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
15738030	○	○	○	<p>以下の両方の条件を満たした場合、制御ドメインが「BAD TRAP: type=31」でパニックすることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 制御ドメインのオペレーティングシステムがOracle Solaris 10の場合 ■ <code>ldm list-domain -o memory primary</code>を実行した結果、RA (実アドレス) が <code>0x200000000000</code> (32TB) より大きい場合 	<p>これは、Solaris 10のパッチ 148888-03で修正されました。</p> <p>[回避方法] 以下の手順を実施してください。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <code>ldm list-domain -o memory primary</code>を実行し、SIZEの値を表示させます。 2. <code>ldm start-reconf primary</code>を実行し、遅延再構成モードにします。 3. <code>ldm remove-memory 256M primary</code>を実行し、割り当てられているメモリを減らします。 4. <code>ldm set-memory <手順1のSIZEの値> primary</code>を実行し、割り当てられているメモリを元のサイズに戻します。 5. 制御ドメインのOracle Solarisを再起動します。 6. <code>ldm list-domains -o memory primary</code>を実行し、RAが <code>0x200000000000</code>より小さくなっていることを確認します。 7. <code>ldm add-spconfig <構成情報名></code>を実行し、XSCFに構成情報を保存します。

SPARC M10-1のハードウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10-1のハードウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
- ハードウェアに関する不具合と回避方法

留意点および制限事項

外付けDVDドライブの使用に関する留意点

USBで接続される外付けDVDドライブでは、USBバスパワー駆動はサポートされていません。

USBメモリの使用に関する留意点

XSCFコマンドのうち、データの保存先としてUSBメモリを指定するコマンドを実行する場合は、あらかじめ、媒体となるUSBメモリをご用意ください。

なお、保存されたデータにはシステムに関する情報が含まれています。USBメモリをご利用になる場合には、セキュリティ保持の観点から、データが保存されたUSBメモリの管理について留意が必要となります。

現在販売されているすべてのメーカーのUSBメモリに対して、XSCFとの接続性および動作を保証しているわけではありません。ご使用のUSBメモリによっては、XSCFファームウェアのエラーやリセットなどの異常が発生する場合も考えられます。そのような異常が発生した場合には、ただちに、USBメモリの使用を中止してください。XSCF用USBポートにUSBメモリを接続する場合は、直接、USBポートにUSBメモリを接続してください。USBハブやUSB延長ケーブルなどを介して接続すると、エラーの要因となる場合があります。

ハードウェアに関する不具合と回避方法

現時点で確認されている不具合はありません。

SPARC M10-4のハードウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10-4のハードウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
 - ハードウェアに関する不具合と回避方法
-

留意点および制限事項

外付けDVDドライブの使用に関する留意点

USBで接続される外付けDVDドライブでは、USBバスパワー駆動はサポートされていません。

USBメモリの使用に関する留意点

XSCFコマンドのうち、データの保存先としてUSBメモリを指定するコマンドを実行する場合は、あらかじめ、媒体となるUSBメモリをご用意ください。

なお、保存されたデータにはシステムに関する情報が含まれています。USBメモリをご利用になる場合には、セキュリティ保持の観点から、データが保存されたUSBメモリの管理について留意が必要となります。

現在販売されているすべてのメーカーのUSBメモリに対して、XSCFとの接続性および動作を保証しているわけではありません。ご使用のUSBメモリによっては、XSCFファームウェアのエラーやリセットなどの異常が発生する場合も考えられます。そのような異常が発生した場合には、ただちに、USBメモリの使用を中止してください。XSCF用USBポートにUSBメモリを接続する場合は、直接、USBポートにUSBメモリを接続してください。USBハブやUSB延長ケーブルなどを介して接続すると、エラーの要因となる場合があります。

ハードウェアに関する不具合と回避方法

現時点で確認されている不具合はありません。

SPARC M10-4Sのハードウェアに関する情報

ここでは、SPARC M10-4Sのハードウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- 留意点および制限事項
 - ハードウェアに関する不具合と回避方法
-

留意点および制限事項

外付けDVDドライブの使用に関する留意点

USBで接続される外付けDVDドライブでは、USBバスパワー駆動はサポートされていません。

USBメモリの使用に関する留意点

XSCFコマンドのうち、データの保存先としてUSBメモリを指定するコマンドを実行する場合は、あらかじめ、媒体となるUSBメモリをご用意ください。

なお、保存されたデータにはシステムに関する情報が含まれています。USBメモリをご利用になる場合には、セキュリティ保持の観点から、データが保存されたUSBメモリの管理について留意が必要となります。

現在販売されているすべてのメーカーのUSBメモリに対して、XSCFとの接続性および動作を保証しているわけではありません。ご使用のUSBメモリによっては、XSCFファームウェアのエラーやリセットなどの異常が発生する場合も考えられます。そのような異常が発生した場合には、ただちに、USBメモリの使用を中止してください。XSCF用USBポートにUSBメモリを接続する場合は、直接、USBポートにUSBメモリを接続してください。USBハブやUSB延長ケーブルなどを介して接続すると、エラーの要因となる場合があります。

クロスバーボックスの交換に関する制限事項

replacefru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの交換は、現時点ではサポートされていません。クロスバーボックスを交換する場合は以下の手順で実施してください。

1. **showhardconf**コマンドを実行して、交換対象のクロスバーボックスがマスタ筐体でないことを確認します。
「Role:Master」となっているクロスバーボックスがマスタ筐体です。

```
XSCF> showhardconf
:
XBBOX#80 Status:Normal; Role:Master; Ver:2038h; Serial:2111206001;
:
```

2. 交換対象のクロスバーボックスがマスタ筐体の場合は、**switchscf**コマンドを実行して、スタンバイ状態に切り替えます。

```
XSCF> switchscf -y -t Standby
```

3. マスタXSCFが切り替えられたため、XSCFにログインしなおします。
4. クロスバーボックスを使用している物理パーティション (PPAR) の電源を切断してから、交換対象のクロスバーボックスの電源を切断します。
クロスバーボックスのオペレーションパネルにあるPower-LEDが消灯されたことを確認します。
5. 交換対象のクロスバーボックスの入力電源を切断して、交換を実施します。

注—入力電源が切断されたときに、交換対象のクロスバーボックスに対するエラーログが登録されますが、すべて無視してください。

6. クロスバーボックスの電源コードを入力電源に接続します。
詳細は、『SPARC M10システム インストレーションガイド』の「5.4 クロスバーボックスにケーブルを接続する」を参照してください。
クロスバーボックスのオペレーションパネルにあるSTANDBY-LEDが点灯するまで待機します。
7. **diagxbu**コマンドを実行して、交換したクロスバーボックスに対して診断を実施します。

```
XSCF> diagxbu -y -b XX -t YY -t ZZ
```

XX、YY、ZZには、電源切断状態のSPARC M10-4SのBB_ID(00~15)を指定します。

8. **showlogs**コマンドを実行して、診断中にエラーが発生していないことを確認します。

```
XSCF> showlogs error
```

9. 故障部品がないことを確認します。

```
XSCF> showstatus
```

拡張接続用ラック2の増設に関する制限事項

addfru(8)コマンドを使用したクロスバーボックスの増設は、現時点ではサポートされていません。『SPARC M10システム インストールガイド』の「8.4 拡張接続用ラック2を増設する」にある手順17および18を以下に読み替えて、クロスバーボックスの増設作業を実施してください。

17. クロスバーボックス、**SPARC M10-4S**すべての電源コードを入力電源に接続します。
詳細は、「5.2 SPARC M10-4/SPARC M10-4Sにケーブルを接続する」および「5.4 クロスバーボックスにケーブルを接続する」を参照してください。
18. ファームウェアをマスタXSCFと同じ版数にアップデートします。
 - XCP 2040以前の場合

```
XSCF> getflashimage file:///media/usb_msd/images/XCPxxxx.tar.gz  
XSCF> flashupdate -c update -m xcp -s version
```

- XCP 2041以降の場合

```
XSCF> flashupdate -c sync
```

ハードウェアに関する不具合と回避方法

現時点で確認されている不具合はありません。

PCIボックスのハードウェアに関する情報

ここでは、PCIボックスのハードウェアに関する特記事項や不具合について説明します。

- PCIボックスに対するダイレクトI/O機能
- 論理ドメインの構成情報およびOpenBoot PROM環境変数の退避／復元方法
- PCIボックスに関する不具合と回避方法

PCIボックスに対するダイレクトI/O機能

SPARC M10-1/M10-4はXCP 2044から、SPARC M10-4SはXCP 2050からPCIボックスに対して、Oracle VM Server for SPARCのダイレクトI/O機能がサポートされるようになりました。これにより、PCIボックスのスロットごとに、I/Oドメインに割り当てることができるようになります。なお、Oracle VM Server for SPARCのダイレクトI/O機能の詳細は、ご使用のバージョンの『Oracle VM Server for SPARC 管理ガイド』を参照してください。

SPARC M10-4にPCIボックスが接続されている場合は、ダイレクトI/O機能を使用する前に下記の設定を行ってください。なお、SPARC M10-1は、下記の設定を行う必要はありません。SPARC M10-1にPCIボックスを接続するだけでダイレクトI/O機能が使用できます。

ダイレクトI/O機能を設定する／表示する

PCIボックスに対するダイレクトI/O機能を設定する場合は、XSCFファームウェアの `setpciboxdio(8)` コマンドを使用します。また、現在の設定を確認する場合は、`showpciboxdio(8)` コマンドを使用します。

`setpciboxdio(8)` および `showpciboxdio(8)` コマンドの詳細は、『SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアル』または各コマンドのマニュアルページを参照してください。

論理ドメインの構成情報および OpenBoot PROM環境変数の退避／復 元方法

1. 制御ドメイン上で**ldm ls-sconfig**コマンドを実行し、構成情報一覧を表示させ、保存が必要な構成情報を確認します。
次の例は、test3が現在の構成情報であることを示しています。

```
# ldm ls-sconfig
factory-default
test1
test2
test3 [current]
```

現在の構成が「next poweron」となっている場合は、XSCFと制御ドメインに保存されている構成情報に差があるため、**ldm add-sconfig**コマンドを実行し、現在の構成情報を保存しておきます。

以下は、test3が「next poweron」であるため、test4に現在の構成情報を保存する例です。

```
# ldm ls-sconfig
factory-default
test1
test2
test3 [next poweron]
# ldm add-sconfig test4
# ldm ls-sconfig
factory-default
test1
test2
test3
test4 [current]
```

2. **ldm set-sconfig**コマンドを実行し、保存したい構成情報を設定します。
以下は、test1を保存する例です。

```
# ldm set-sconfig test1
# ldm ls-sconfig
factory-default
test1 [next poweron]
test2
test3
```

3. XSCF上で**poweroff(8)**および**poweron(8)**コマンドを実行し、物理パーティション(PPAR)の電源を切断／投入します。

システムの電源切断は論理ドメインを適切な手順で停止し、ldm unbindコマンドでinactive状態に移行させてから行ってください。

以下は、PPAR 0番の電源の切断／投入の例です。

```
XSCF> poweroff -p 0
XSCF> poweron -p 0
```

4. **ldm ls-spconfig**コマンドを実行し、指定した構成情報に設定されていることを確認します。

次の例は、test1が現在の構成情報に設定されていることを示しています。

```
# ldm ls-spconfig
factory-default
test1 [current]
test2
test3
```

5. **ldm ls-constraints -x**コマンドを実行し、現在の構成情報を保存します。必要であれば、XMLのバックアップを行っておきます。

以下は、test1.xmlに現在の構成情報を保存する例です。

```
# ldm ls-constraints -x > /var/tmp/test1.xml
```

6. **more**コマンドを実行し、構成情報が正しいかを確認します。

```
# more /var/tmp/test1.xml
<?xml version="1.0"?>
<LDM_interface version="1.3" xmlns:xsi=http://www.w3.org/2001/
XMLSchema-instancece
```

7. 保存が必要な構成情報分だけ、手順2～6を繰り返します。
8. **ldm set-spconfig factory-default**コマンドを実行し、システムをfactory-defaultに設定します。

```
# ldm set-spconfig factory-default
# ldm ls-spconfig
factory-default [next poweron]
test1 [current]
test2
test3
```

9. **ldm rm-spconfig**コマンドを実行し、すべての構成情報を削除します。

```
# ldm rm-spconfig test1
# ldm rm-spconfig test2
# ldm rm-spconfig test3
```

```
# ldm ls-config
factory-default [next poweron]
```

10. 論理ドメインをシャットダウンしてOpenBoot PROMの状態にします。
システムの電源切断は論理ドメインを適切な手順で停止し、ldm unbindコマンドでinactive状態に移行させてから行ってください

```
# shutdown -i0 -g0 -y
```

11. printenvコマンドでOpenBoot PROM環境変数を確認します。

```
{0} ok printenv
Variable Name      Value      Default Value
ttya-rts-dtr-off   false     false
ttya-ignore-cd     true      true
keyboard-layout
reboot-command
security-mode      none      No default
security-password  No default
security-#badlogins 0          No default
diag-switch?      false     false
local-mac-address? true      true
fcode-debug?      false     false
scsi-initiator-id 7         7
oem-logo          No default
oem-logo?        false     false
oem-banner        No default
oem-banner?      false     false
ansi-terminal?    true      true
screen-#columns   80       80
screen-#rows      34       34
ttya-mode         9600,8,n,1,- 9600,8,n,1,-
output-device     virtual-console virtual-console
input-device      virtual-console virtual-console
auto-boot-on-error? false     false
load-base         16384     16384
auto-boot?        false     true
network-boot-arguments
boot-command      boot      boot
boot-file
boot-device       /pci@8000/pci@4/pci@0/pc ... disk net
multipath-boot?   false     false
boot-device-index 0         0
use-nvramrc?     false     false
nvramrc
error-reset-recovery boot      boot
```

「…」で省略されている箇所があれば、該当箇所を再確認します。

```
{0} ok printenv boot-device
boot-device = /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@0/scsi@0/disk@p0,0
```

12. XSCF上でpoweroff(8)コマンドを実行し、PPARの電源を切断します。

```
XSCF> poweroff -p 0
```

13. 使用しているモデルに応じて、手順14以降でXMLファイルから論理ドメインの構成情報を復元します。
- SPARC M10-1の場合、PCIボックスのあるシステムで、XCP 2043以前のファームウェアからXCP 2044以降のファームウェアにアップデートした際、手順14以降でXMLファイルから論理ドメインの構成情報を復元します。
ファームウェアアップデートの詳細は、「SPARC M10システム システム運用・管理ガイド」を参照してください。
 - SPARC M10-4/M10-4Sの場合、setpciboxdio(8)コマンドを実行し、PCIボックスのダイレクトI/O機能の有効/無効を切り替えたときは、手順14以降でXMLファイルから論理ドメインの構成情報を復元します。
setpciboxdio(8)コマンドの詳細は「SPARC M10システム XSCFリファレンスマニュアル」を参照してください。
14. XSCF上でshowdomainconfig(8)コマンドを実行し、次回のPPAR起動時の構成情報がfactory-defaultであることを確認します。
以下は、次回の起動時の構成情報がfactory-defaultになっている例です。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID      :0
Booting config
(Current)    :factory-default
(Next)       :factory-default
-----
Index        :1
config_name  :factory-default
domains      :1
date_created:-
```

以下は、次回の起動時の構成情報がfactory-defaultではない例です。この場合、setdomainconfig(8)コマンドを実行し、次回のPPAR起動時の構成情報をfactory-defaultに設定します。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID      :0
Booting config
(Current)    :test1
(Next)       :test2
:
XSCF> setdomainconfig -p 0 -i 1
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID      :0
Booting config
(Current)    :test1
(Next)       : factory-default
-----
```

```
Index      :1
config_name :factory-default
domains    :1
date_created:-
```

15. **OpenBoot PROM**の状態で止めるために、**OpenBoot PROM**環境変数の **auto-boot?**を確認します。値が**true**ならば**false**に変更します。

```
XSCF> setpparparam -p 0 -s bootscript "setenv auto-boot? false"
PPAR-ID of PPARs that will be affected:0
OpenBoot PROM variable bootscript will be changed.
Continue? [y|n] :y
```

変更した場合、**OpenBoot PROM**環境変数を確認します。

```
XSCF> showpparparam -p 0
use-nvramrc      :-
security-mode    :-
bootscript       :
setenv auto-boot? false
```

16. **poweron(8)**コマンドを実行し、**PPAR**を再起動します。

```
XSCF> poweron -p 0
```

17. **showdomainstatus(8)**コマンドを実行し、制御ドメインの状態が「**OpenBoot Running**」が表示され**OpenBoot PROM**の状態になっていることを確認します。

```
XSCF> showdomainstatus -p 0
Logical Domain Name  Status
primary              OpenBoot Running
```

18. **console(8)**コマンドを実行し、制御ドメインコンソールに切り替えます。

```
XSCF> console -p 0 -y
Console contents may be logged.
Connect to PPAR-ID 0?[y|n] :y
```

19. 手順11の記録を元に**OpenBoot PROM**環境変数を復元します。
以下は、**auto-boot?**を**true**に復元する例です。

```
{0} ok setenv auto-boot? true
auto-boot? = true
{0} ok printenv auto-boot?
auto-boot? = true
```

20. **Oracle Solaris**をブートします。

```
{0} ok boot
```

21. 制御ドメイン上でシステムが**factory-default**で起動したことを確認します。

```
# ldm ls-spconfig
factory-default [current]
```

22. **ldm init-system**コマンドおよび**shutdown**コマンドを実行し、制御ドメインを再起動します。

```
# ldm init-system -i /var/tmp/test1.xml
Initiating a delayed reconfiguration operation on the primary domain.
All configuration changes for other domains are disabled until the primary
domain reboots, at which time the new configuration for the primary domain
will also take effect.
# shutdown -y -g0 -i6
```

23. 制御ドメインの再起動後、他の論理ドメインの**bind**および**start**を行います。依存関係のある論理ドメインについては、正しい順序で起動してください。以下は、**root-domain**および**guest-domain**を**bind**および**start**する例です。

```
# ldm bind root-domain
# ldm start root-domain
# ldm bind guest-domain
# ldm start guest-domain
```

重複したリソースが存在することで**bind**に失敗した場合、論理ドメインから該当リソースを削除します。

以下は、重複したリソースを削除する例です。

```
# ldm bind root-domain
No free matching I/O device for LDom root-domain, name PCIE1
# ldm start-reconf primary
# ldm rm-io PCIE1 primary
-----
Notice: The primary domain is in the process of a delayed reconfiguration.
Any changes made to the primary domain will only take effect after it reboots.
-----
```

リソースを削除した場合、制御ドメインを再起動します。

```
# shutdown -i6 -g0 -y
```

リソースを削除した場合、制御ドメインの再起動後、他の論理ドメインのbindおよびstartを行います。

依存関係のある論理ドメインについては、正しい順序で起動してください。

以下は、root-domainおよびguest-domainをbindおよびstartする例です。

```
# ldm bind root-domain
# ldm start root-domain
# ldm bind guest-domain
# ldm start guest-domain
```

24. **ldm ls**コマンドを実行し、論理ドメインが正常に稼働していることを確認します。

```
# ldm ls
NAME                STATE      FLAGS    CONS    VCPU  MEMORY  UTIL  UPTIME
primary             active    -n-cv-   UART    8     8G      66%   4m
root-domain         active    -t----- 5000    8     4G      19%   29s
:
:
```

25. 構成情報を復旧したあと、**ldm add-spconfig**コマンドを実行し、**XSCF**に構成情報を保存します。

以下は、test1の構成情報をXSCFに保存する例です。

```
# ldm add-spconfig test1
# ldm ls-spconfig
factory-default
test1 [current]
```

依存関係のある論理ドメインについては、正しい順序で起動してください。

26. 復旧する構成情報が複数ある場合、手順14~26を繰り返します。

PCIボックスに関する不具合と回避方法

ここでは、PCIボックスに関する不具合と回避方法をPCIボックスファームウェアの版数ごとに記載します。

すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法

サポートされているすべての版数のPCIボックスファームウェアで発生しうる不具合と回避方法を、以下の表に示します。

表 7-1 すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法

RTIF番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130703-001		○	○	PCIボックスをPCIホットプラグ (PHP) で組み込む場合、PCIボックスのスロット6、7、10、11のうちHBAが搭載されていない箇所は、Oracle Solarisの <code>cfgadm(1M)</code> コマンドの実行結果が <code>empty</code> ではなく、 <code>disconnected</code> となります。表示には問題がありますが、HBAを搭載すると通常どおり動作します。 なお、PCIボックスを接続したあとに論理ドメインを再起動した場合は、この現象は発生しません。	表示の問題だけで動作に影響はありません。
RTIF2-130703-002		○	○	PCIボックスをPCIホットプラグ (PHP) で組み込む場合、 <code>lane degrade</code> することがあります。	PHPを実施する場合は、 <code>cfgadm -c connect</code> を実行しないで、 <code>cfgadm -c configure</code> を実行してください。
RTIF2-130703-003		○	○	PCIボックスをPCIホットプラグ (PHP) で組み込む場合、PCI-Express コレクタブルエラーが発生し、次回のOracle Solaris起動時にPCIボックスが縮退されることがあります。	PCIボックスをPHPで組み込んだあとにフォルトエラーメッセージが出力される場合は、PCIボックスを再度組み込んでください。
RTIF2-130703-004		○	○	PCIボックスをPCIホットプラグ (PHP) で組み込む場合、PCIボックスが認識されないことがあります。	PCIボックスをPHPで組み込んだあとにPCIボックスが認識されない場合は、PCIボックスを再度組み込んでください。

表 7-1 すべてのPCIボックスファームウェア版数に関する不具合と回避方法 (続き)

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130724-002	○	○	○	<p>PCIボックスに6Gbps SASカードをPCIホットプラグ (PHP) で組み込む場合、PCI Express 8laneでリンクアップせず、prtdiag(1M)コマンドのSpeedが「5.0GTx4」または「5.0GTx2」と表示されることがあります。</p> <p>[prtdiag出力例] /SYS/PCI0 PCIE LSI,sas-pciex1000,72 LSI,2008 5.0GTx2 /pci@8000/pci@4/pci@0/pci@8/pci@0/pci@0/pci@0/pci@1/pci@0/pci@8/LSI,sas@0</p>	物理パーティション (PPAR) またはI/Oドメインを再起動するか、6Gbps SASカードをPHPで再度組み込んでください。
RTIF2-130724-003	○	○	○	<p>物理パーティション (PPAR) 起動時に、PCIボックスのスロット6、7、10、11に搭載されたPCIカードで以下のエラーが登録されることがあります。</p> <p>[エラーメッセージ例] FRU: /MBU/PCI#0/ PCIBOX#0000/PCI#7 Msg: PCICARD failed</p>	Oracle Solarisからデバイスが認識できる場合は、このエラーメッセージを無視してください。

PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-2 PCIボックスファームウェア版数1120で解決された不具合

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130703-009	○	○	○	<p>物理パーティション (PPAR) またはI/Oドメイン起動時に、PCIボックスに搭載されている6Gbps SASカードがPCI Express 8laneでリンクアップしないことがあります。</p>	6Gbps SASカードがPCI Express 8laneでリンクアップしない場合は、PPARまたはI/Oドメインを再起動するか、6Gbps SASカードをPCIホットプラグ (PHP) で再度組み込んでください。

PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-3 PCIボックスファームウェア版数1110で解決された不具合

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130703-007	○	○	○	物理パーティション (PPAR) またはI/Oドメイン起動時に、リンクカードが、誤って故障として検出されることがあります。 [メッセージ例] FRU: /BB#0/PCI#1/LINK Msg: TWI access error	本エラーメッセージが表示されても、動作に影響ありません。
RTIF2-130703-008	○	○	○	物理パーティション (PPAR) またはI/Oドメイン起動時にPCI-Expressコレクタブルエラーが発生し、次回のOracle Solaris起動時にPCIボックスが縮退されることがあります。	エラーメッセージが出力される場合は、PPARまたはI/Oドメインを再起動するか、PCIボックスをPCIホットプラグ (PHP) で再度組み込んでください。

PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合

PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合を、以下の表に示します。

表 7-4 PCIボックスファームウェア版数1100で解決された不具合と回避方法

RTI番号	SPARC M10-1	SPARC M10-4	SPARC M10-4S	説明	回避方法
RTIF2-130703-005	○	○	○	物理パーティション (PPAR) またはI/Oドメイン起動時に、PCIボックスに搭載されたPCIeカードまたはリンクボードが、誤って故障として検出されることがあります。 [PCIeカードのメッセージ例] FRU: /BB#0/PCI#3/ PCIBOX#1234/PCI#3 Msg: PCICARD failed [リンクボードのメッセージ例] FRU: /BB#0/PCI#0/ PCIBOX#1234/LINKBD Msg: TWI access error	本エラーメッセージが表示されても動作に影響ありません。リンクボードにこの不具合が発生すると、PCIボックスのCHECK LEDが点灯しますが、次のPPAR起動時にこの不具合が発生しない場合、CHECK LEDは消灯されます。
RTIF2-130703-006	○	○	○	ioxadm -v listコマンドで表示されるPCIボックスのシリアル番号がすべて0 (「0000000000」) の場合、PCIボックスの入力電源が投入されてから、物理パーティション (PPAR) の電源が初めて投入されるまでに検出されたハードウェアの故障が、エラーとして登録されません。	I/Oボードとファンバックプレーンを同時に交換したり、他のPCIボックスで使用したことのあるI/OボードやファンバックプレーンをPCIボックスに搭載したりしないでください。ioxadm -v listコマンドで表示されるPCIボックスがすべて0 (「0000000000」) になった場合は、XSCFファームウェアのioxadm(8)コマンドを実行し、シリアル番号を元に戻してください。この場合、fieldeng権限が必要です。詳細は、「PCIボックスのシリアル番号を元に戻す (RTIF2-130703-006)」を参照してください。

PCIボックスのシリアル番号を元に戻す (RTIF2-130703-006)

ioxadm -v listコマンドで表示されるPCIボックスのシリアル番号がすべて0 (「0000000000」) になった場合は、XSCFファームウェアのioxadm(8)コマンドを実行し、シリアル番号を元に戻してください。この場合、fieldeng権限が必要です。

```
XSCF> ioxadm [-fvAM] serial target serial_num
```

targetには対象となるPCIボックス識別子を指定します。この場合は「PCIBOX#0000」です。serial_numには変更前のPCIボックスのシリアル番号を「nnnnnnnnnn」の形式で指定します。シリアル番号はPCIボックス筐体のラベルに記載されています。

このコマンドにより、PCIボックスのシリアル番号と識別子が置き換わります。

ioxadm -v listコマンドを実行すると、置き換わったシリアル番号と識別子が確認できます。

以下は、PCIボックスのシリアル番号が「2121212006」の場合の例です。

```
XSCF> ioxadm serial PCIBOX#0000 2121212006
XSCF> ioxadm -v list
Location          Type      FW Ve  Serial Num      Part Num          State
PCIBOX#2006       PCIBOX   -      2121212006
PCIBOX#2006/PSU#0 PSU       -      FEJD1201000170  CA01022-0750-D/   On
PCIBOX#2006/PSU#1 PSU       -      FEJD1245001342  CA01022-0750-D/7060988 On
PCIBOX#2006/IOB   IOBOARD  1110   PP121001JM      CA20365-B66X 007AF   On
PCIBOX#2006/LINKBD BOARD    -      PP123300TR      CA20365-B60X 001AA   On
PCIBOX#2006/FANBP FANBP   -      PP120904SY      CA20365-B68X 004AC   On
BB#00-PCI#00     CARD     1110
XSCF>
```


マニュアルの変更内容

ここでは、SPARC M10 システム関連マニュアルに関して、出版後に確認された最新の情報やマニュアルの変更内容を示します。

- 『SPARC M10-1 サービスマニュアル』の変更内容
- 『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』の変更内容
- 『SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアル』の変更内容

『SPARC M10-1 サービスマニュアル』の変更内容

ここでは、現在確認されている、『SPARC M10-1 サービスマニュアル』の変更内容を示します。

表 8-1 『SPARC M10-1 サービスマニュアル』の変更内容

項番または項目	変更内容
2.2.2	<p>「2.2.2 オペレーションパネルの操作機能」の「表2-1 モードスイッチの機能」内「Serviceモード」にある以下の記述が変更されます。</p> <p>[変更前] 電源スイッチによるシステムの起動または停止ができる。</p> <p>[変更後] 電源スイッチによるシステムの起動はできないが、停止はできる。</p>

『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』の変更内容

ここでは、現在確認されている、『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』の変更内容を示します。

表 8-2 『SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル』の変更内容

項番または項目	変更内容
2.2.2	「2.2.2 オペレーションパネルの操作機能」の「表2-3 モードスイッチの機能」内「Serviceモード」にある以下の記述が変更されます。 [変更前] 電源スイッチによるシステムの起動または停止ができる。 [変更後] 電源スイッチによるシステムの起動はできないが、停止はできる。

『SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアル』の変更内容

ここでは、SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアルの変更内容を示します。

なお、『SPARC M10 システム XSCF リファレンスマニュアル』の変更内容は、特に断りのないかぎり、マニュアルページにも適用されます。また、マニュアルページの情報よりもここでの内容が優先されます。

表 8-3 『SPARC M10 システム XSCFリファレンスマニュアル』の変更内容

項番またはコマンド	変更内容
reset(8)	以下の項目にある記述が修正されます。 <ul style="list-style-type: none">形式 「-g <i>hostname</i>」が「-g <i>domainname</i>」に修正されます。使用例2 「showlogs power」は「showpparprogress」に修正されます。